

# 長根遺跡

——町道天神・長根線改良工事に伴う発掘調査報告書——



平成 15 年 3 月

宮城県瀬峰町教育委員会

# 長根遺跡

——町道天神・長根線改良工事に伴う発掘調査報告書——

平成15年3月

宮城県瀬峰町教育委員会



長根遺跡 1号住居跡カマド



長根遺跡 1号住居跡カマド断面

カマド天井部崩落土内に土師器甕3点が入れ子状となり残存していた。



長根遺跡 1号住居跡出土遺物



「外沢田B遺跡」採集遺物

## 発刊の辞

このたび『瀬峰町文化財調査報告書第21集 長根遺跡』の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

調査は、町道天神長根線の改良工事により遺跡が破壊されるために実施したもので  
す。当初、この地区は遺跡の範囲に隣接する地点でありましたので遺構や遺物がある  
かどうかはよく分かりませんでした。しかし、確認調査によって竪穴住居跡を確認す  
ることことができ、大変驚きました。さらに調査が進むとこの竪穴住居跡の構造や出土遺  
物から関東地方の影響が分かり、驚きが増しました。関東地方の人々がどうして瀬峰  
町に住むことになったのか大きな興味を抱かせてくれます。

ところで、今回の発掘調査は町道改良工事に関わるものでした。地域住民の皆様の  
生活が向上するよう道路などの施設整備は重要と考えますが、その一方で工事により  
貴重な文化財が失われてしまいます。各種工事と埋蔵文化財の保存や発掘調査が円  
滑に進むよう今後も地域の皆様に御協力をいただき、努力してまいりたいと思いま  
す。

最後に今回の発掘調査にご指導、ご協力いただきました宮城県教育庁文化財保護  
課、瀬峰町建設課、上荒町地区及び川前地区の区長をはじめとする地域住民の方々、炎  
天下の中作業にあたっていただいた作業員の皆様に感謝を申し上げて、発刊の辞とい  
たします。

平成15年3月

瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭

## 目 次

カラー図版	
発刊の辞	
目 次	
例 言	
I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
II. 調査に至る経緯	4
III. 基本層序	5
IV. 検出された遺構と遺物	8
1. 積穴住居跡と出土遺物	8
2. 土塙と出土遺物	12
3. 溝跡と出土遺物	14
4. 基本層序 I、II 層及び沢堆積層出土遺物	15
V. 考察	17
1. 出土遺物の分類と編年的な位置付け	17
2. 住居跡の構造	19
3. まとめと課題	23
VI. 潮峰町大里地区で採集された遺物について	26
1. はじめに	26
2. 採集された遺物について	26
3. まとめ	30
VII. 高清水町「外沢田B遺跡」採集遺物について	35
1. はじめに	35
2. 採集された遺物について	36
3. まとめ	37
VIII. まとめ	39
引用参考文献	40
写真図版	

## 図 目 次

第1図 潮峰町の位置	1	第12図 15区遺構配置図	14
第2図 長根遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第13図 3・4号溝跡断面	15
第3図 長根遺跡の位置と調査対象地区	4	第14図 基本層序 I、II 層出土遺物	16
第4図 第1工区トレーンチ配置図	6	第15図 1号住居跡出土遺物	18
第5図 第2工区トレーンチ配置図	7	第16図 カマド復元想定図	20
第6図 1号住居跡	10	第17図 採集された遺物（1）	32
第7図 1号住居跡出土遺物（1）	11	第18図 採集された遺物（2）	33
第8図 1号住居跡出土遺物（2）	12	第19図 採集された遺物（3）	34
第9図 2号土塙	12	第20図 「外沢田B遺跡」の位置と周辺の遺跡	35
第10図 2区遺構配置図	13	第21図 「外沢田B遺跡」採集遺物	38
第11図 5号土塙	13		

## 表 目 次

第1表 主柱穴規模一覧	9	第5表 基本層序 I、II 層 及び沢堆積層出土遺物集計表	15
第2表 1号住居跡出土遺物集計表	9	第6表 宮城県内のカマド天井部に 土師器を用いる類例	21
第3表 2号土塙出土遺物集計表	12		
第4表 5号土塙出土遺物集計表	14		

## 図版目次

表紙	長根遺跡1号住居跡	図版3	1号住居跡カマド②(南より)
カラー1	長根遺跡1号住居跡カマド 長根遺跡1号住居跡カマド断面	図版4	1号住居跡床面遺物出土状況(北より) 1号住居跡ビット1断面(西より)
カラー2	長根遺跡1号住居跡出土遺物 「外沢田B遺跡」採集遺物	図版4	2号土坑 第2工区遠景(東より) 15区全景(東より)
図版1	2区全景(東より) 1号住居跡検出状況(南より) 1号住居跡床面(南より)	図版5	長根遺跡1号住居跡出土遺物
図版2	1号住居跡カマド①(南より) 1号住居跡カマド断面(東より) 1号住居跡カマド遺物出土状況	図版6 図版7 図版8	大里地区採集遺物(1) 大里地区採集遺物(2) 「外沢田B遺跡」採集遺物

## 例　　言

1. 本書は町道天神・長根線改良工事に係る長根遺跡の発掘調査報告書および「瀬峰町大里地区採集遺物」、「高清水町「外沢田B遺跡」採集遺物」の報告書である。

2. 調査は以下の要項で実施した。

### [調査要項]

[遺　　跡　名]	長根遺跡(宮城県遺跡登載番号: 46050)
[所　　在　地]	宮城県栗原郡瀬峰町大里字中宮田地内
[調　　査　面　積]	約400m <sup>2</sup>
[調　　査　期　間]	平成14年8月7日～9月4日、10月3日～10月9日
[調　　査　主　体]	瀬峰町教育委員会 教育長 濱田 利昭
[調　　査　担　当]	瀬峰町教育委員会 社会教育課 主事 安達 調仁
[調　　査　協　力]	宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町建設課 瀬峰町上荒町行政区(区長高橋孝男)、瀬峰町川前行政区(区長高橋力衛)、㈱佐々木土建 小野寺敬行 鈴木 広茂 高橋 崇行 高橋 昭三 佐藤 信行 穴木 広美 鈴木 雄孝 千葉 栄子 星宗久美子
[整　理　参　加　者]	星宗久美子 千葉 栄子 穴木 広美 小野寺 明
[事　務　局]	瀬峰町教育委員会社会教育課 課長 佐々木 敬 同 上 課長佐佐 岳原 正剛 同 上 主事 安達 調仁

3. 土層や土器の色調表現については「新編標準土色帳」20版(小山・竹原1997、日本色研事業株式会社)に準拠し、土色区分については国際土壤学会に準拠している。

4. 遺構番号は検出した遺構に通し番号を付した。

5. 図中にある方位は真北を表している。

6. 図中に示した国土座標の数値は測量法改正(平成13年6月20日公布、平成14年4月1日施行)以前の数値を用いている。

7. 遺構の縮尺は1/60、調査区は1/100を基本とし、遺構断面図は1/60に統一し、スケールを添えた。また遺物は1/3に統一した。なお、須恵器は断面黒塗りとしている。また、鉄製品は錆取りが不完全な段階で図化している。

8. 遺物写真的縮尺は任意である。

9. 第2図は国土地理院発行「25,000集館、高清水を複製し用いた。

10. 発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々よりご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表す。後藤秀一、佐久間光平、村田晃一、相原淳一(宮城県教育庁文化財保護課)、及川規、平間邦子(東北歴史博物館)、佐藤敏幸(矢本町教育委員会)、千葉孝弥(多賀城市理蔵文化財センター)、高橋誠明、佐藤優(古川市教育委員会)、車田敦(田尻町教育委員会)、櫻田逸子(高清水町史編纂事務局)、宇部則朗(青森県八戸市教育委員会)、菅原洋夫(福島県文化振興財團)、塩谷慎介(福島県西郷村教育委員会)、平川南(国立歴史民俗博物館)、鳥羽政之、市川淳子(埼玉県阿門町教育委員会)、金子彰男(埼玉県神川町教育委員会)、中島広顧(東京都北区教育委員会)、松本太郎、松田礼子(千葉県市川市教育委員会)、柿沼修平、村山好文、長内美知枝(日本考古学研究所)、故佐々木徳雄(元瀬峰町公民館長)、佐々木尚見(元瀬峰町文化財保護委員長)、飯塚義則(元瀬峰町文化財保護委員)、柴田薫、故阿部正光(元瀬峰町教育委員会)

宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史博物館、古川市教育委員会

11. 調査によって得られた資料は全て、瀬峰町教育委員会で保管している。

12. 本書の執筆、編集は、瀬峰町教育委員会社会教育課主事安達調仁が行った。

## I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県の北西部に位置する栗原郡は岩手、秋田両県と接している。瀬峰町はその中でも南東端に所在し、宮城県北部を南北に貫く奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけて伸びる北上山地に挟まれた仙北平野低地帯のうち、北上川流域右岸の一角落に位置している。

ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら南東方向に連なる派生丘陵のほぼ末端部にあたり、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、内沼、長沼、蘿栗沼が群在する。中でも、蘿栗沼はかつて当湖沼地帯最大の水域を有していたが、江戸時代の新田開発、さらに近年の排水・開田事業によって、現在ではその旧状をほとんど留めていないものの、瀬峰町を貫流する瀬峰川、小山田川、壹刈川の遊水池として、当町の東南部に隣接している。



第1図 瀬峰町の位置

長根遺跡は、JR東北本線瀬峰駅の南西約2.8km、瀬峰町を東西に横切るなだらかで低平な4つの丘陵中、南側に位置する四ッ壇原丘陵から派生する小丘陵（以下、荒町丘陵と呼称する）に位置している。北側には沖積地が広がり、小山田川が東流する。遺跡は、現在、宅地、田地、畑地、森林などに利用されており、特に昭和30～40年代頃の段状に開田された部分もあり、保存状況が不良な地点が多い。

本遺跡の基盤は礫層、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる鮮新世：瀬峰層で、その上に礫層と凝灰岩から構成される更新世：高清水層、さらに最上層には第四系のローム層が堆積しており、丘陵上に所在する町内の諸遺跡とほぼ同じ様相を呈している。

### 2. 遺跡の歴史的環境

瀬峰町内では丘陵上に多くの遺跡が所在する。ここでは、これまでの調査、研究を踏まえ、遺跡周辺の古墳時代以降の歴史的環境を記述する。

古墳時代前期の遺跡としては大境山遺跡、ニッ谷遺跡など、中期の遺跡としては荒町遺跡、泉谷遺跡などが知られている。後期の遺跡としては泉谷館跡、民生病院裏遺跡、三代遺跡、大境山遺跡が知られており、いずれも標高約20～30m前後の丘陵上に位置するものである。泉谷館跡（阿部・赤沢・佐藤1987）では11棟の住居跡が検出され、栗廻式期の土器とそれにはば並行すると考えられる関東地方鬼高式期の土器が出土している。なお、仙台市郡山遺跡（仙台市教育委員会1981ほか）、志波姫町御駒堂遺跡（宮城県教育委員会1982）などでは、7世紀後半から8世紀前半にかけての関東系の土器が相次いで出土しているが、泉谷館跡出土の関東系土器の年代は、概ね7世紀前半と考えられ、それらに先行する段階のものとして注目を集めている。同様の関東系土器は出土状況は明瞭ではないも

の、民生病院裏遺跡、大境山遺跡からも出土している。三代遺跡からは、栗開式期の中でも新しい段階に属する資料が得られている（阿部正光1983）。以上古墳時代の遺跡の概要を述べたが、いずれも蕉栗沼、もしくは、それに流入する小山田川を間に望める丘陵上に位置している。よって、当時、既に小山田川の土砂運搬作業によって徐々に沖積化しつつあった旧蕉栗沼縁辺部において、遺跡ごとに水田經營が展開されていたと推定されるが、今後は、各遺跡の編年とその関係を、より詳細に究明することも必要と思われる。なお、関東系土器に象徴される関東地方との交流経路については、当町が海岸部から離れた内陸部に位置するものの、舟を用いて北上川、追川を遡れば容易に宮城県北部湖沼地帯の一つ、旧蕉栗沼に到達しうるという地理的条件を備えているところから、陸路のほかに海路の存在も考えてゆく必要があろう。

瀬峰町で遺跡の数が最も多いのは奈良・平安時代で、49遺跡を数えることができる。桃生田前遺跡、下富前遺跡は沖積地を望む微高地に立地している。現在までに寺沢丘陵に位置する岩石Ⅰ遺跡、大境山遺跡、寺沢丘陵東端に位置する長者原Ⅰ遺跡、民生病院裏遺跡、下藤沢Ⅱ遺跡、下藤沢Ⅲ遺跡、清水山Ⅰ遺跡、下富前遺跡、桃生田前遺跡について発掘調査が実施されている。一連の調査によって、多数の住居跡と豊富な遺物が発見されており、宮城県北部における当時の集落構成を考える上で良好な資料を提供している。即ち、35,000m<sup>2</sup>を調査し、23軒の住居跡が検出された大境山遺跡（瀬峰町教育委員会1983）では、各住居跡が適度に散在する現象が顕著に認められているが、こうした傾向は前述の遺跡や栗原郡南部の諸遺跡においても認めることができる。宮城県北部における集落の一タイプとして抽出されるものであろう。一方、集落以外の遺跡はほとんど確認されておらず、蔵骨器が出土した蒲盛遺跡（阿部・赤沢1984）が墓制に関する遺跡として知られている。

中世の城館跡は藤沢館跡などがあげられる。瀬峰川沿いの丘陵上に構築された単郭式で小規模のものである。下富前遺跡では14世紀頃の龍泉窯系青磁皿の破片が採集されており（佐々木・阿部1982）発掘調査により小規模な建物や井戸跡で構成される屋敷跡が確認され、無釉陶器が出土している（瀬峰町教育委員会2000、2002）。この他、泉谷遺跡では13世紀前半頃の無釉陶器壺口縁部破片、中三代遺跡や樹形館跡から在地産の無釉陶器甕破片、荒町遺跡から無釉陶器や14世紀頃の古瀬戸壺肩部破片、16世紀代の瀬戸あるいは美濃の大窯産と考えられる灰釉皿口縁部片が採集されている。現在までのところ、中世の所産と考えられる塚は泉谷館跡で検出された方形溝状遺構（阿部・赤沢・佐藤1987）がある。堆積土の状況からマウンドを持つと推定され、出土遺物から鎌倉時代中期から後期にかけての宗教的な壇であると考えられる。その他に経塚と考えられる経壇遺跡、鎌倉時代の和鏡が出土した寺沢遺跡が知られている。なお、板碑については、大正年間に20数基あることが知られていた（鈴木玄雄1922）が、近年、破損したり、所在不明となっているものがあり、現在では17基確認されているに過ぎない。

現在の瀬峰町は、近世においては奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道（高清水宿～佐沼宿～登米宿）の宿駅、瀬嶺宿が設置された。この瀬嶺宿の西方2.5km、藤沢村の寺沢地内と富村の北ノ沢地内を横切る佐沼街道には一里塙が保存されており、交通史上貴重な遺構である。泉谷館跡は、仙台藩土橋本氏（知行高80貫380文）の在郷屋敷

## I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

である。昭和61・62年度にかけて発掘調査が実施され、数棟の掘立柱建物跡や西門跡、塙跡などが検出された（阿部・赤沢・佐藤1987）。中村の荒町地区には、除と呼ばれる所がある。仙台藩土蟻坂氏の在郷屋敷で、寛永21（1644）年、所替となるまで居住したと伝えられる。町内には多数の塙が知られているが、確実に江戸時代とわかるものとしては、佐沼街道の一里塙、諏訪原経塙、清林塙、それに発掘調査によって盛土を伴う墓であることが判明した下藤沢Ⅱ遺跡（瀬峰町教育委員会1988）及び下藤沢Ⅲ遺跡の塙群をあげることができるだけで、その大部分は所属年代は未だ明らかにされていない。



第2図 長根遺跡の位置と周辺の遺跡

## II. 調査に至る経緯

平成13年8月、瀬峰町建設課より瀬峰町大里字中宮田地内で平成14年度工事予定である町道天神長根線改良工事の計画がある旨連絡を受けた。周知の遺跡内には含まれていないが、隣接地にあたるため、現地踏査する旨を伝えた。9月に建設課、地権者との合同打ち合わせ会の際、教育委員会も現地を確認したが、その時点では現地が山林であるため地表面を観察することができず、遺跡に含まれるかどうか判断をすることはできなかった。再度、見通しの良い秋から冬の時期に踏査を行い判断することとした。11月23日に宮城県文化財保護地区指導員佐藤信行氏と現地踏査を行ったが対象地区での遺物の発見はできなかった。そこで、周辺での遺物の散布状況を踏査や過去のデータなどで確認した結果、遺跡の可能性が高く、遺構・遺物の有無を確認する必要があるのではないかとの認識に至った。踏査の結果を瀬峰町建設課に伝えるとともに、宮城県教育庁文化財保護課にも同様の連絡を行つた。

具体的な計画が固まった平成14年度に、4月15日付けで瀬峰町長より協議書の提出があつたため、5月16日宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町建設課、瀬峰町教育委員会で現地踏査を行い、遺構の有無を確認する事で合意に至つた。その後、5月23日付けで発掘通知の提出があつた。

確認調査は建設課との協議の結果、以下の工程で実施することとした。調査部分を大きく2工区に分け、工区内の樹木の伐採終了後、第1工区部分の確認調査を行う。その後、第2工区の伐採樹木の搬出後、確認調査を実施するという工程である。その際、遺構が検出された場合は別途協議を行うこととした。



第3図 長根遺跡の位置と調査対象地区

## II. 調査に至る経緯

とした。

第1工区の確認調査は平成14年8月7日より開始された。調査区を10区設け、8月22日まで各調査区の遺構確認作業を実施したが、明確な遺構は検出されなかった。ただし、2区ではII層中から須恵器破片が出土すること、II層下部のIV層上面から性格不明の落ち込み（1号住居跡）と沢堆積層と考えられる黒色土の落ち込みが認められたことから、8月21日よりII層を除去し、IV層上面で遺構確認を実施することとした。8月22日、宮城県教育厅文化財保護課職員の現地観察の際、2区の遺構検出作業中、住居跡と思われる落ち込みを発見した。その後、調査区を拡張し、木の根の抜根に苦労しながら、8月23日には住居跡であることを確認することができた。遺構は少数であったため、8月26日より事前調査に切り替えることとし、遺構の掘り下げを行った。途中、カマド天井部の構築材が良好な状態で出土したため、図面の作成と遺物の取り上げに時間がかかったが、9月4日までには調査を終了することができた。

第2工区の確認調査は10月3日から開始された。調査区を8区設け、遺構検出作業を行った。15区で時期不明の溝跡などを検出し掘り下げを行った。各調査区では遺構の検出が少なく、遺物もほとんど出土しないことから各種記録を作成し10月9日には器材を搬出し、調査を終了した。

なお、記録は確認調査部分は1/100の平板測量で実施し、遺構部分は任意に設定した点を基に簡易遺り方を組み、1/20の平面図、断面図を作成し、この点を国土座標の乗る工事用の杭に位置づけた。写真記録は35mm（カラー、モノクロ）を用いている。

調査終了後、各種図面及び遺物の整理作業を行い、平成15年3月31日に全ての作業を無事終了した。

## III. 基本層序

第1工区2～4区及び第2工区では同様の堆積状況を示すもので、以下にその基本層序を示す。

### 〔基本層序I層〕

黒色（10YR1.7/1）シルト質粘土～暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトである。しまりがなく、粘性はある。木の根や礫を含むもので、2区付近や第2工区付近では現代のゴミなどを含んでいる。本遺跡内の表土である。層厚は最大で約18cmである。

### 〔基本層序II層〕

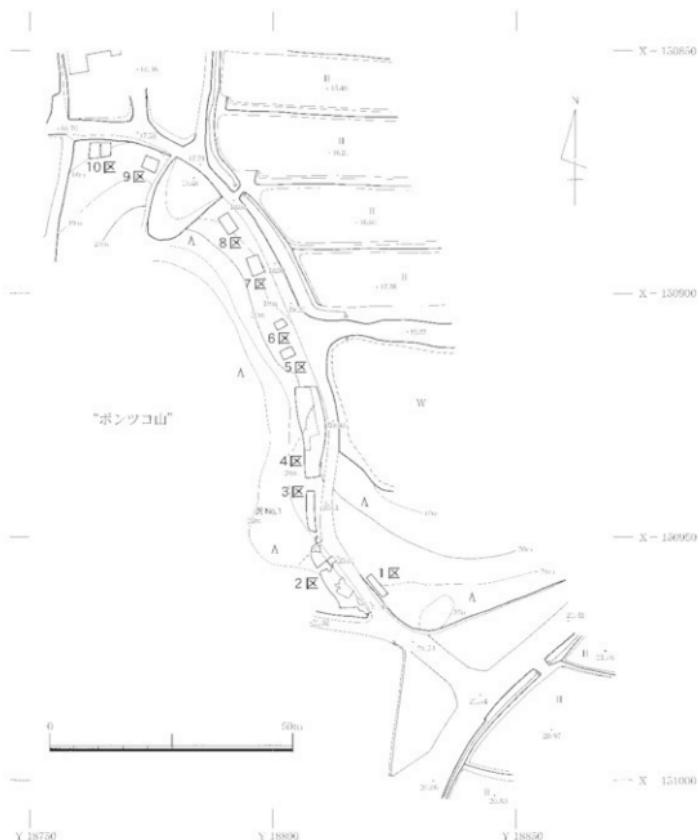
にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルトである。しまり、粘性ともにある。第1工区2～4区、第2工区で認められた。層厚約39cmであるが、第2工区で検出された沢付近ではやや厚い。

### 〔基本層序III層〕

にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルトで、しまりは普通で粘性はない。漸移層と考えられる。

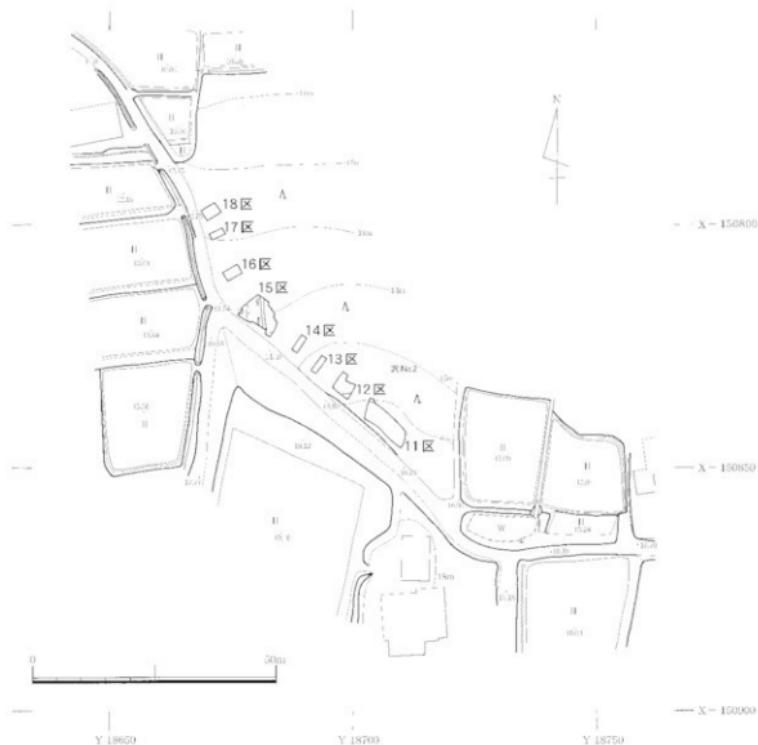
### 〔基本層序IV層〕

本遺跡での地山であり、各調査区で様相が異なる。2区では3層に細分された。



第4図 第1工区トレーニング配置図

### III. 基本層序



第5図 第2工区トレンチ配置図

IV a 層 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土で、しまりがあり、粘性はふつうである。黄褐色粘土粒をまばらに含む。

IV b 層 にぶい黄橙 (10YR6/3) シルト質粘土で、しまり、粘性ともにある。白色粘土である。

IV c 層 橙色 (7.5YR6/6) 粘土で、しまり、粘性ともにある。

他の調査区ではにぶい黄褐色 (10YR5/4) ~明黄褐色 (10YR7/6) 粘土である。地山層の上下関係を正確には把握できていないが、これらはIV c 層と類似するか、あるいはこれより下部に堆積するものとも考えられる。

なお、2~4 区及び12~13区のII層下で埋没した沢を確認した（以下、沢No.1、No.2とする）。沢No.1 1層上層で若干の遺物が出土したほかは遺物を確認することはできなかった。

## [沢No.1 1層]

黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土で、しまりはあまりなく、粘性はある。地山粒や黒色土粒を少量含む。層厚約35~40cmである。

## [沢No.1 2層]

黒色 (10YR1.7/1) 粘土であり、しまりはふつうで、粘性はある。層厚約40cmである。

## [沢No.2 1層]

黒色 (10YR2/1) シルト質粘土で、しまりはあまりなく、粘性はある。層厚約10cmである。

## [沢No.2 2層]

黒色 (10YR1.7/1) シルトであり、しまりはふつうで、粘性はある。地山粒を少量含む。層厚約5cmである。

## [沢No.2 3層]

明黄褐色 (10YR7/6) 粘土で、しまりふつうで、粘性あり。地山崩落土である。層厚約6cmである。

## [沢No.2 4層]

暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルトでしまりはふつうで粘性はある。上部に薄く黒色 (10YR1.7/1) 粘土が見られる。層厚約10cmである。

1、5、6、9区では削平のためI層直下でIV層を確認し、7、8区ではI層下で黒色 (10YR1.7/1) 粘土質シルト (層厚約25cm)、その下部でIV層を確認した。

## IV. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は竪穴住居跡1棟、土塁2基、溝跡2条である。

### 1. 竪穴住居跡と出土遺物

#### 1号住居跡

[位置] 2a区中央。

[確認面] 基本層序IV層。

[重複] 認められない。

[規模・平面形] 東西3.85m×南北3.72m、町道により南東隅は削平されるが隅丸方形と考えられる。

[方 向] N-37° -W (西辺)。

[層 位] 大別3層、第1層は人為堆積、第2層は自然堆積、第3層は自然堆積と考えられる。各層には炭化物が含まれ、特に床面の直上では多くの炭化物が認められた。

[壁] 基本層序IV層、0.22cm残存 (西辺)、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床 面] 掘り方埋土を床とする。

#### IV. 検出された遺構と遺物

[延床面積] 14.32m<sup>2</sup>

[掘り方] 層厚0.15m、掘り方底面はほぼ平坦である。埋土は2層確認された。

[カマド] 北辺ほぼ中央に付設。長さ1.71m、幅1.13m（焼き口付近で0.64m）、側壁の高さは焼き口部で約0.18～0.21m、カマド底面で約0.31mである。側壁は地山（大半が白色粘土）を削りだしたもので、側壁の一部を掘りくぼめ、側壁と天井部に黄褐色粘土を貼り付けている。削り出しのため側壁は住居北辺に対しやや斜めとなる。天井部は崩落しており、焼き口部付近の天井崩落土内には土師器長胴甕3点が入れ子状になつて検出された。天井部構築材と考えられる。

[柱穴] ピット1～3は主柱穴。隅丸長方形である。ピット1、2では抜き取り痕が確認された。

[柱痕跡] いずれも隅丸長方形であり、柱痕跡の長軸方向は住居跡中央を向いている。

[貯蔵穴状ピット] カマド左脇に位置する。板材の抜き取り痕跡より古い。不整円形を呈し、長軸0.77m×短軸0.65m、深さ0.18mである。1～4層は自然堆積、5層は人為堆積で掘り方埋土と見られる。

[ピット] ピット4はカマド左側壁の南側で検出。楕円形で規模は0.30×0.44m、深さは0.17mである。カマド崩落土に覆われる。ピット5は西辺ほぼ中央で検出。円形で規模は0.52×0.58m、深さは0.09mである。板材の抜き取り痕跡よりも古いくことから廃絶時には埋まりきっていたものと見られる。床面中央付近では掘り方を持たない楕円形の焼け面（0.35×0.50m）が認められた。

[周溝] 幅0.05～0.15m、深さ0.06～0.10mで一部途切れる。平面形は出入りが見られる。板材を這らせ壁を補強したものと考えられ、板材の痕跡は確認できなかつたが、板材抜き取り痕跡と考えられる。

[出土遺物] カマド天井構築土：土師器甕　床面：土師器甕

掘り方埋土：土師器甕　カマド堆積層及び住居堆積層：土師器甕・甕

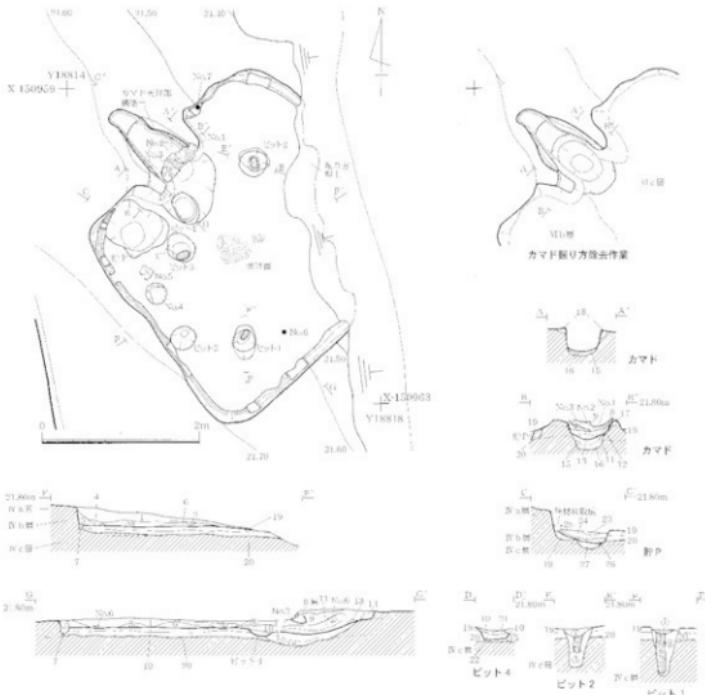
板材の抜き取り痕上面：鉄製品

このうちカマド堆積層（器面摩滅なし）と住居堆積層（器面摩滅あり）の遺物が接合している。その他、土師器片、須恵器片が出土したが、細片のため図示できなかつた。

種別	土			鋪		漆器	土器	陶器	鐵製品
	环	盤	器・甕	漆	鐵				
板	0	0	3	1	0	1	0	0	0
出	2	0	0	0	0	0	0	0	0
画	0	1	0	0	0	0	0	0	0
床	0	1	0	0	0	0	0	0	0
面	0	0	0	0	0	0	0	0	0
筋当き取り痕（ピット2）	1	0	0	0	0	0	0	0	0
筋当き取り痕跡上皿	0	0	0	0	0	0	0	1	0
漆器（天井構築土）	0	3	0	0	0	0	0	0	0
10層（カマド裏側壁？）	3	0	0	0	4	0	0	0	0
14層（カマド構築時？）	0	1	0	0	0	0	0	0	0
17ピット掘り方	0	1	0	0	0	0	0	0	0
19層（掘り方環土）	0	1	0	0	0	0	0	0	0

\*接合したものは1点とし、1個部分となつたものも同様に算定した。

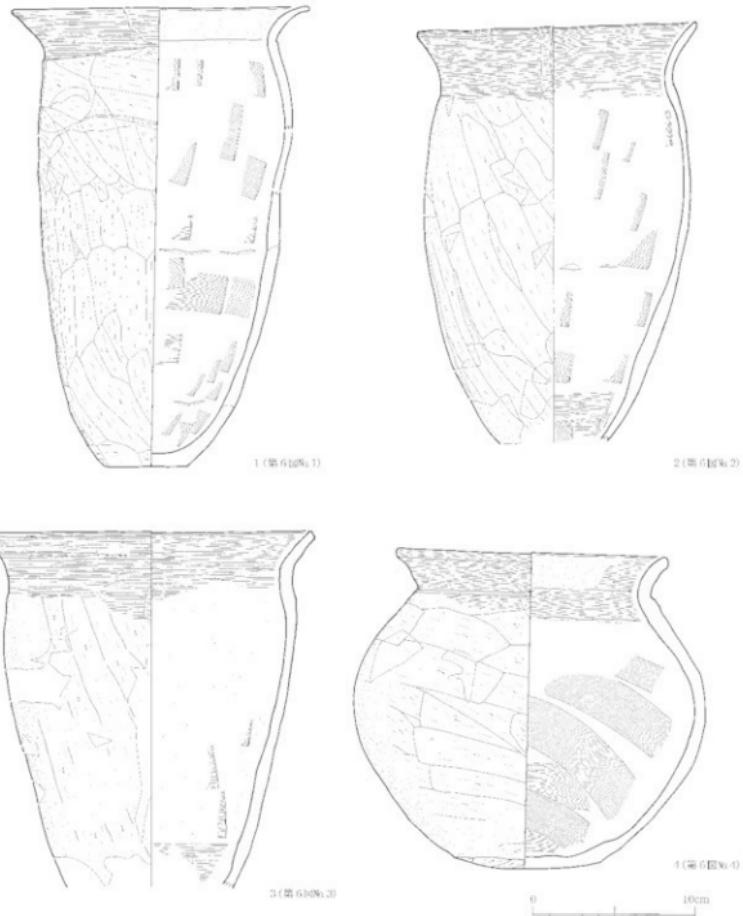
第2表 1号住居跡出土遺物集計表



No.	土色	土性	古物	物	第	堆积範囲
1. 砂地色 10YR5/2	赤	土質: 砂質 特徴: 土多く、表面に砂利多く含む	地山土多く、表面に砂利多く含む	人骨		大別1層
2. 黄褐色 10YR4/4	黄褐色	土質: 土多く、表面に砂利多く含む 特徴: 表面に砂利多く含む	地山土多く、表面に砂利多く含む	人骨		大別1層
3a. 黄褐色 10YR2/1	黄褐色	土質: 粘土質シルト 特徴: 酸化物跡、炭化物跡を多く含む	地山土多く、酸化物跡、炭化物跡を多く含む	自然		大別2層
3b. 黄褐色 10YR2/1	黄褐色	土質: 粘土質シルト 特徴: 硫化物、炭化物を多く含む	地山土多く、硫化物、炭化物を多く含む	自然		大別2層
4. 黄褐色 10YR3/2	シルト質粘土	土質: 地山土多くまばらに含む	自然			大別3層
5. 中褐色 10YR5/6	粘土	土質: 地山土多く、硫化物、炭化物をまばらに含む	自然			大別3層
6. 黄褐色 10YR4/3	黄褐色	土質: 粘土質シルト 特徴: 地山土多く、表面に砂利多く含む	地山土多く、表面に砂利多く含む	人骨		大別4層
7. 黄褐色 10YR3/2	粘土	土質: 地山土多く、表面に砂利多く含む	地山土多く、表面に砂利多く含む	人骨		大別4層
8. 黄褐色 10YR3/2	シルト	土質: 地山土多く、表面に砂利多く含む	地山土多く、表面に砂利多く含む	人骨		大別4層
9. (C-5) 黄褐色 10YR4/3	粘土	土質: 地山土多くまばらに含む	自然			カマド掘り方堆积土
10. (C-5) 黄褐色 10YR5/4	粘土	土質: 地山土多く、硫化物、炭化物をまばらに含む	自然			カマド掘り土
11. 黄褐色地色 10YR5/7	シルト質粘土	土質: 地山土多く、表面に砂利多く含む	自然			カマド掘り方堆积土
12. 黄褐色 2.5YR4/2	粘土	土質: 地山土多くまばらに含む、バババサ。	自然			カマド掘り方堆积土
13. 黄褐色 10YR3/1	シルト質粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	自然			カマド掘り方堆积土
14. 黄褐色地色 10YR4/2	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	自然			カマド掘り方堆积土
15. 黄褐色 10YR4/4	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	自然			カマド掘り方堆积土
16. 黄褐色 10YR4/4	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	自然			カマド掘り方堆积土
17. 黄褐色地色 2.5YR4/2	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、カマド掘り方堆积土付近に黏付されたもの	自然			カマド掘り土
18. 中褐色地色 10YR2/6	粘土	土質: 地山土多くまばらに含む、カマド掘り方堆积土付近に黏付されたもの	自然			カマド掘り土
19. (C-5) 黄褐色 10YR7/4	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	上部に炭化物含む			壁面土
20. (C-5) 黄褐色 10YR7/6	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	自然			壁面土
21. 黄褐色 10YR3/1	粘土質シルト	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む	自然			壁面土
22. (C-5) 黄褐色 10YR4/4	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、硫化物を多く含む	自然			壁面土
23. 黄褐色地色 2.5YR4/2	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、硫化物を多く含む	自然			壁面土
24. 黄褐色地色 10YR4/2	シルト質粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、人骨?	自然			壁面土
25. 黄褐色 10YR3/1	シルト質粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、上部に炭化物、硫化物含む。自然	自然			壁面土
26. 黄褐色地色 10YR4/2	シルト質粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、自然	自然			壁面土
27. (C-5) 黄褐色 10YR7/2	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、硫化物を多く含む、硫化物を多く含む	自然			壁面土
28. 黄褐色地色 2.5YR4/2	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、硫化物を多く含む	自然			壁面土
29. 黄褐色 10YR3/2	シルト質粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、人骨?	自然			柱根跡
30. (C-5) 黄褐色 10YR7/4	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、人骨?	自然			柱根跡
31. 黄褐色地色 10YR6/2	粘土	土質: 地山土多く、表面をぼからに含む、人骨?	自然			柱根跡

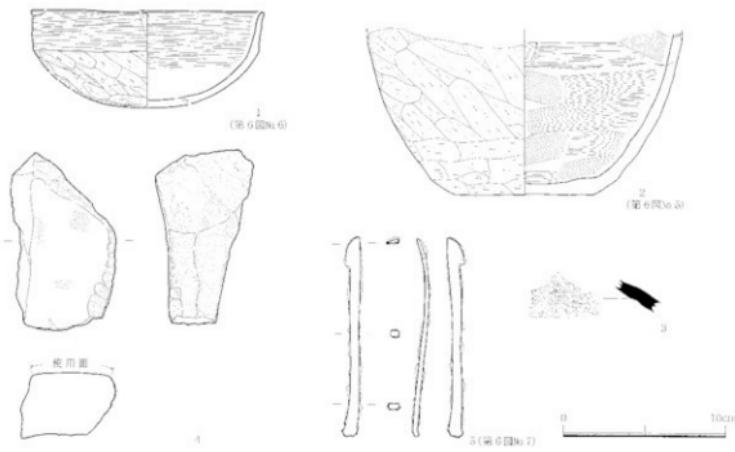
第6図 1号住居跡

#### IV. 検出された遺構と遺物



### 第7図 1号住居跡出土遺物(1)

No.	部位名	現存	過去	日付	既往	特	因	年齢
1	前 左 上顎歯 売	元	28.7	18.6	5.0	左側ケラチノイド、右側ケラチノイド(10月)/左、左側ケラチノイド(10月)/左、左側ケラチノイド(10月)		R008 5-3
2	前 右 上顎歯 気 指	-	17.4			左、右ケラチノイド、カリエス、右 0.25mm/左、右 0.25mm/左、右ケラチノド、ハイマウス、右 0.25mm/左		R009 5-4
3	前 左 上顎歯 気 指	-	20.0			左側ケラチノイド、右側ケラチノイド(10月)/左、左側ケラチノイド(10月)/左、左側ケラチノイド(10月)		R012 5-6
4	床 左 上顎歯 完	元	19.5	16.6	8.2	左側ケラチノイド、右側ケラチノイド(12月)/左、右側ケラチノイド(12月)/左、左側ケラチノイド(12月)		R011 5-6



第8図 1号住居跡出土遺物（2）

## 2. 土塁と出土遺物

### 2号土塁

[位置] 2a区南側。

[確認面] 基本層序IV層。

[重複] 認められない。

[規模・平面形] 東西1.0m以上×南北1.5m以上、町道により削平されるが、隅丸方形と考えられる。

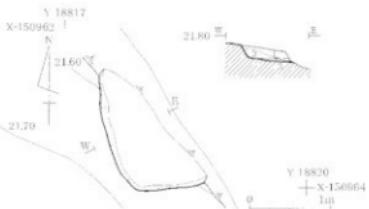
[方向] N-13° - W (西辺)。

[層位] 大別2層、いずれも自然堆積。

[壁] 基本層序IV層、0.14m残存、底面からやや急に立ち上がる。

[底面] 基本層序IV層、底面はやや凹凸がある。

[出土遺物] 堆積層から土師器片が出土したが、細片で摩滅が著しいため、図示できなかった。



No.	土色	土性
1	灰褐色 10YR4/2	シルト質粘土
2	黑褐色 10YR3/2	シルト質粘土
3	黑褐色 10YR3/1	シルト質粘土

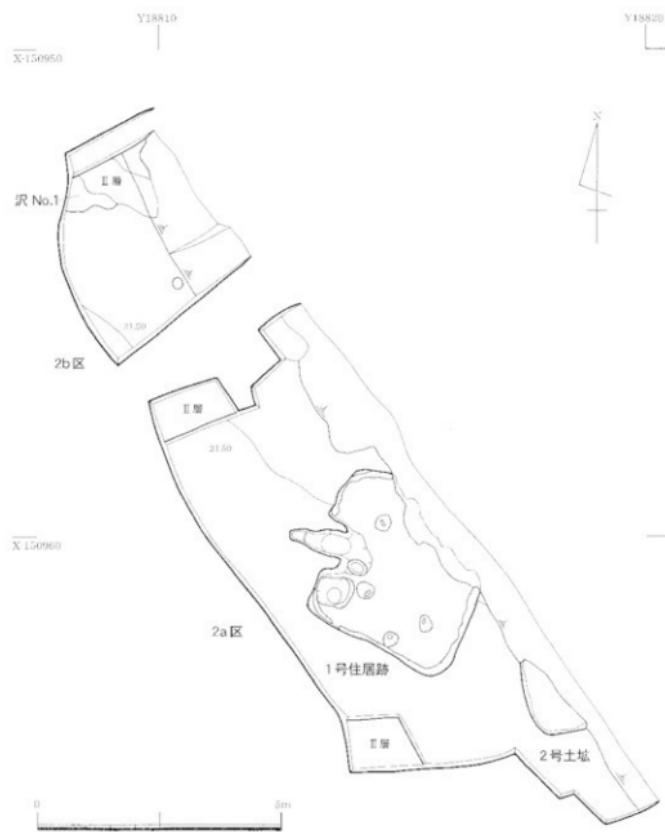
古有物等	堆積範囲
細かい塊状物をまばらに含む。根多く含む。自然。	大別1層
細かい塊状物を若干含む。自然。	大別2層
細かい塊状物をまばらに含む。自然。機械時?	

第9図 2号土塁

種類	土師器 費	土 性 不 明	小計
1種	1	3	4

第3表 2号土塁出土遺物集計表

IV. 検出された遺構と遺物



第10図 2区遺構配置図

5号土塙

[位置] 15区南西隅。

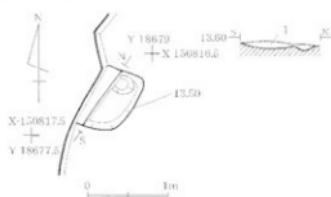
[確認面] 基本層序Ⅲ層。

[重複] 認められない。

[規模・平面形] 長軸0.84m × 短軸0.56m以上、隅丸方形と考えられる。

[層位] 1層、自然堆積。

[壁] 基本層序Ⅲ、Ⅳ層、0.08m残存、底面



No.	土色	土種	含有物等
1	黄褐色 25Y4/1	粘土質シルト	自然

第11図 5号土塙

からゆるやかに立ち上がる。

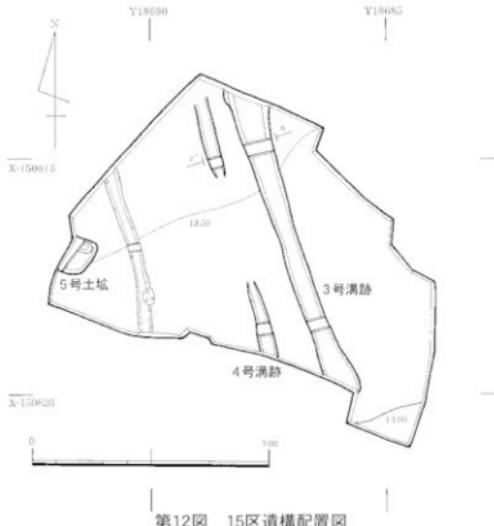
[底面] 基本層序IV層、底面は凹凸がある。

[出土遺物] 検出面から土師器細片1点が出土した。細片で摩滅が著しい。

[所見] 出土遺物から古代以降であるが、性格は不明である。

種類	上級層	中級層	下級層
個数	1	1	1

第4表 5号土塁出土遺物集計表



第12図 15区遺構配置図

### 3. 溝跡と出土遺物

#### 3号溝跡

[位置] 15区中央。

[断面形] 「U」状。

[確認面] 基本層序III、IV層。

[底面] IV層を底とする。

[重複] 認められない。

[堆積層] 1層。自然堆積。

[方向] N-19° -W。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[規模] 全長6.3m確認。幅0.34~0.80m,

[所見] 時期は不明である。

深さ0.04~0.24m

#### 4号溝跡

[位置] 15区中央。

[断面形] 「U」状。

[確認面] 基本層序III、IV層。

[底面] IV層を底とする。

[重複] 認められない。

[堆積層] 1層。自然堆積。

[方向] N-15° -W。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

#### IV. 検出された遺構と遺物

【規 模】 南から1.6m確認し、2.3m離れて1.7m確認。幅0.24~0.38m、深さ0.03~0.10m。

【所 見】 時期は不明である。



No.	土色	土性	含在物等	地層範囲
1	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルトをまばらに含む。自然	3号溝跡
2	黒褐色 2.5Y3/2	粘土質シルト	自然	4号溝跡

第13図 3・4号溝跡断面

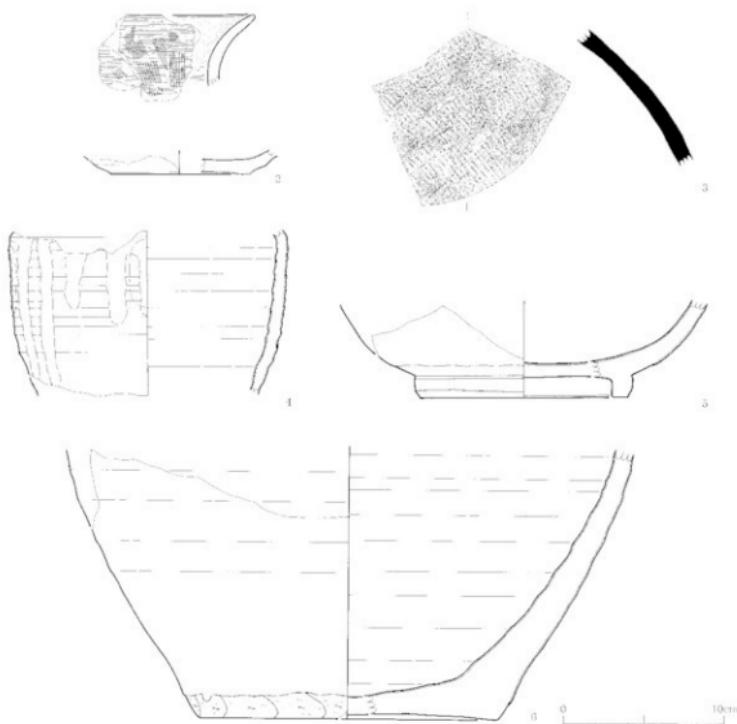
#### 4. 基本層序Ⅰ、Ⅱ層及び沢堆積層出土遺物

基本層序Ⅰ、Ⅱ層からは土師器、須恵器、近世陶磁器、近世以降の遺物が出土している。これらの出土地区、層位については第5表を参照していただきたい。沢No.1付近の基本層序Ⅱ層、沢No.1堆積層上層や他の調査区から出土した遺物はいずれも小片で内外面ともに摩滅が著しく、斜面上方から流れ込んだ可能性が高いと考えられる。ここでは、実測可能な出土遺物6点について図示する。

第14図1は土師器甕口縁部破片でハケメ調整されることから古墳時代に位置づけられるものと見られるが、小片のため断定できない。4~6は近世陶器である。産地は不明であるが、宮城県北部で生産されたものの可能性があろう。表採品であり、近年まで使用されていたものと見られる。

地 区	種別 層位	須 湯 器			土 師 器			近世陶器	鉄 宙	粘 土 壌	近 代 瓦	不 明	
		环	壺・甕	环	壺・甕	不明							
2 a 区	I 層	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
	底 土	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1
2 b 区	I 层	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	II 层	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3 区	II 层	0	1	2	3	36	0	0	0	0	0	0	0
	沢 I 层	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
4 区	I 层	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	II 层	1	3	6	2	18	1	0	4	1	0	0	0
7 区	I 层	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	II 层	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
8 区	I 层	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	II 层	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
10 区	不 明	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	I 层	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
11 区	II 层	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	II 层	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15 区	II 层	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1区周辺 表 採	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2区周辺 表 採	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
2-3区周辺 表 採	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
11 区 表 採	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
小計		1	15	8	8	60	5	1	6	2	3		

第5表 基本層序Ⅰ、Ⅱ層及び沢堆積層出土遺物集計表



No.	地区・層位	遺物名	残存	断面	口径	底径	特 記	登録	回数
1	3 区・Ⅱ層	土師器裏	口縁	—	—	—	外:ハケヌテ→縁ナギ, 底白(2.5YN7/2), 内:厚底, 縁ナギ, 底黄(2.5Y7/2)	R009	—
2	4 区・Ⅱ層	水鉢	底部1/3	—	—	8.6	外:口沿, 内:内底(10YR6/3), 底:内輪赤褐色, 内:口沿, 外底は土色, 内:底(10YR6/3)	R005	—
3	2 区・表層	瓦	裏	—	—	—	外:施子タコ, 白陶, 底黑(10YR3/2-3/1), 内:押さし痕跡一様ナギ, 底灰(10YR4/1)	R001	—
4	2 区・表層	瓦	裏	—	—	—	外:ロフロ, 黒地, 斜面黒(10YR3/2), 内:ロフロ, 黑地, 底:黑(10YR3/2)→輪モリープ(5Y4/3)	R002	—
5	2 a 区・Ⅰ層	吉野陶器石井	底	—	—	13.0	内:ロフロナギ, 黑地, 黑(10YR3/2)→輪モリープ(5Y4/3)	R003	—
6	1.1 区・表層	吉野陶器裏	底～底部	—	—	16.4	外:ロフロナギ, 黑(10YR3/2), 底ナギ, 内:内底黒(10YR4/3), 内:ロフロナギ, 黑(10YR3/2)	R007	—

第14図 基本層序 I、II 層出土遺物

## V. 考察

ここでは、1号住居跡出土遺物と住居跡の構造について検討を加える。

### 1. 出土遺物の分類と編年的な位置付け

出土遺物のうち実測が可能で特徴がわかるものは土師器壺1点、甕5点、石製品1点、鉄製品1点である。

#### (1) 分類

##### 【土師器】

###### 壺A

半円球で底部から強く内湾しながら口縁部に至り、口縁部が直立するもの。非ロクロ調整で口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ調整が行われ、口縁部と体部の境には稜がみられる。

###### 甕A

非ロクロ調整で長胴形のもの。胴部上半に最大径を持ち、底部に向かうにつれて細くなる。口縁部は外反もしくは外傾する。胴部外面はヘラケズリ調整が行われる。頸部に段を持つもの（1類）と稜を持つもの（2類）に分かれる。また、口縁端部は丸いものと四角のものがある。

###### 甕B

非ロクロ調整で長胴形のもの。胴部中央付近に最大径を持ち、口縁部は外反する。胴部外面はヘラケズリ調整が行われる。頸部に稜を持つ。口縁端部は丸い。

###### 甕C

非ロクロ調整で球胴形のもの。頸部に段をもつもので口縁部は外傾する。口縁端部は丸い。胴部中央に最大径を持つものでソロバン玉のような形態である。外面胴部及び底部はヘラケズリ調整が行われ、底部は丸底状になる。

###### 甕D

非ロクロ調整で器形が不明なもの。胴部、底部はヘラケズリ調整が行われ、底部は平底状になる。

##### 【石製品】

砥石である。石材は砂岩で、1面のみを用いている。また、火熱により赤変している。

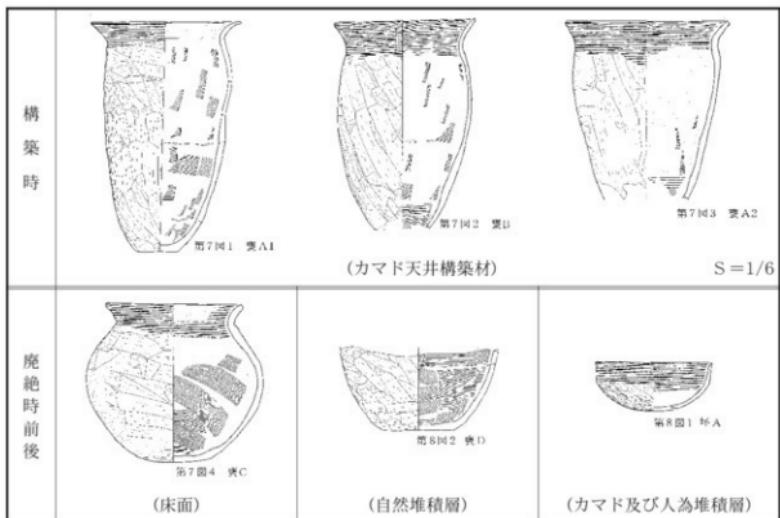
##### 【鉄製品】

ふくれ錆などにより形態は判断しづらいが片刃の鉄鏟と考えられる。茎部断面は長方形である。

以上の分類から、壺は内面非黒色処理、ナデ調整、甕は外面ヘラケズリ調整されており、東北地方南部の在地土師器とは異なる事が判明した。但し、胎土や焼成から在地で製作されたものと考えられる。このような土器群は関東地方に類例が求められることから関東系土師器と呼ばれている（註1）。破片資料を含め長根遺跡1号住居跡出土遺物は関東系土師器で構成されている。

## (2) 編年的な位置付け

出土層位から構築時、機能時（床面）、廃絶時の遺物にわけられる。住居跡は壁際などからの初期堆積が始まった後に入為的に埋め戻されており、床面の遺物と廃絶時の遺物は若干の時間幅を持つものと見られる。しかし、住居堆積層とカマド堆積層から出土した土師器坏が接合していること、人為堆積層が床面を部分的に覆うことから時間幅は短いもので住居廃絶前後の一括性の高い遺物として取り扱うことができる。ただし、床面出土遺物は1点のみであるため廃絶時の様相を示している可能性もある。したがって、出土遺物は構築時と廃絶時前後の遺物に2分され、その関係は第15図のように図示できる。



第15図 1号住居跡出土遺物

廃絶時前後の遺物は土師器坏A、斐C、Dから構成される。構築時の遺物は土師器斐A、Bから構成され、廃絶時前後の土器群より古いものである。出土遺物の数量が少ないため器種の欠落があるが、住居構築から廃絶という時間幅をもつ一括性の高い資料として検討を行う。

長根遺跡1号住居跡出土遺物と類似するものとして、志波姫町御駒堂遺跡6号住居跡（宮城県教育委員会1982）、また、坏のみを見れば赤井遺跡関東系土師器C群坏U（矢本町教育委員会2001）等をあげることができる。

御駒堂遺跡6号住居跡からは床面やカマド内から土師器坏、斐、鉢、須恵器坏が出土している。土師器坏では坏Aに類似するものは堆積層から出土した1点のみで、床面から出土した口縁部が短く直立するものが主体であり、底部は平底に近い形態である。斐は長筒形でケズリ調整のもので器形は斐A、Bに類似するが、頸部の稜が不明瞭で口縁部が大きく外反するものもあり、口縁部はいずれも丸

いという違いがある。甕Cに類似する球胴形もあるが口縁部が長く伸び、底部が平底という違いがある。また、少量ではあるがケズリ調整の土師器鉢、ハケメ調整の土師器甕（球胴形）、須恵器坏を含んでいる。赤井遺跡関東系土師器C群坏Uが出土したSI430号住居跡は床面から土師器坏、甕が出土している。坏Uは2点出土しており、身が深いものと浅いものがある。坏Aは身が深いものと類似している。在地の土器も含まれ、坏では体部に稜をもつものやミガキ調整のものがあり、いずれも内面黒色処理されており、甕ではハケメ、ケズリ調整のものが出土している。

長根遺跡1号住居跡出土遺物は出土遺物の数量が少なく器種の欠落が見られるが、器種構成では上記の類例に近いものと考えられる。しかし、御駒堂遺跡では坏で口縁部が短いものが主体となり、甕では類似するものもあるが口縁部が大きく外反するものも含まれ、ケズリ調整の鉢や在地の甕もあり、器種構成に若干の違いが認められる。赤井遺跡SI430号住居跡では器種構成が不明な点があるが、坏では坏Aに類似するものと在地のもの、甕は在地のものが含まれるという違いを持つ。このような相違は関東系土師器の出自や集落内の集団の差である可能性がある。御駒堂遺跡では6号住居跡を含む2群土器は盤状坏を含むことから南武藏に出自の1つを求めていた（宮城県教育委員会1982、長谷川厚1993）。赤井遺跡関東系土師器C群の出自は不明である（矢本町教育委員会2001）。長根遺跡では住居跡1棟のみのため周辺の調査を待って検討する必要がある（註2）。

御駒堂遺跡2群土器は8世紀前半とされている。口縁部が短い坏を主体とし、盤状坏あるいは盤を含むものと含まないものがある。数棟の住居跡で混在することから報告書内では明確には時期差を認めることは出来ないとしているが、長谷川厚氏は関東地方での土器変遷と同じことから時期差を示すものとして捉えている（長谷川厚1993）。関東地方の土師器や宮城県内の関東系土師器では7世紀から8世紀にかけて時期が下るに連れて口縁部が直立する傾向となり（長谷川厚1993）、県内では平底化へ向かう（村田晃一2000）ことから、長根遺跡1号住居跡出土遺物は御駒堂遺跡2群土器と同時期かやや古いと考えられる。また、赤井遺跡関東系土師器C群坏Uは8世紀前葉に位置づけられている。上限については7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられている古川市名生館官衙遺跡SI1255b住居跡（古川市教育委員会1992）や大和町一里塚遺跡第47次調査SI14b住居跡（宮城県教育委員会1999）などには類似する形態の坏が含まれない事からこれより新しいと考えられる。したがって、長根遺跡1号住居跡出土遺物は8世紀前葉頃に位置付けられると考えられる。

## 2. 住居跡の構造

### （1）住居堆積層

床面付近からは多数の炭化物が確認されたが、明瞭な材の形態を残すことができず詳細な記録を作成できなかった。また、床面及び堆積層から出土した遺物の多くに火を受けた痕跡が認められるので1号住居跡は火災の後埋め戻されたと考えられる。住居堆積層の各層には炭化物が含まれており、人為堆積層は自然堆積層が形成された後に行われるので若干の時間幅を持っている。この時間幅が短いことは前述した。主柱穴及び壁を補強するための板材は抜き取られることから住居跡の解体が行われた後に火災にあっている。しかし、住居跡が人為的に焼却されたかあるいはどのような要因で火災に

あったかは不明である。

## (2) カマド

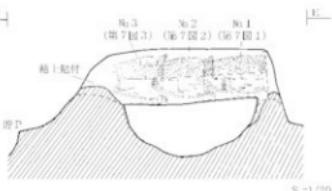
カマドは住居壁を外側に掘り込んで構築し、その先端に煙道の機能を持たせており、焚き口から煙道まで短いものである。カマド側壁は白色粘土を掘り残して構築される。このような形態のカマドは「関東型」と呼称されるもので、県内で調査された「関東型」のカマド構築材が白色粘土を指向する(村田晃一2000)ことと類似する。県内での類例は白色粘土を貼付して構築されることが多いが、この住居跡では比較的浅い地点から白色粘土(IV b層)を採集することができるから側壁を削り残して構築しており、カマドは住居北辺に対しやや斜めに付加されている。天井部は側壁の一部を掘り窪め、黄褐色粘土を貼付して構築される。この粘土内には土師器甕3点を入れ子状にした天井構築材が残存していた。カマドの残存状況が良好であったため、入れ子状の甕3点はやや崩れ落ちた状態ではあるがほぼ原位置を保つ状況であった。焚き口部底面から構築材の甕下部までの高さは約20cmであり、第16図のように復元できる(註3)。

ここで、この3点の出土状況について触れる。No.1は口縁部の1/4ほどが残存し、この残存する部分をカマド右側壁側におく。また、甕口縁部及び底部は胴内部に落ち込んでいた。No.2、3はいずれも底部が欠損し、甕内部にまでカマド構築土が流れ込んでいる。このことから意図的に打ち欠いたかどうかは不明であるが底部破損のもの(No.2、3)と底部が残存するもの(No.1)を用いていると考えられる。胴部内で確認された底部片及び口縁部片は浮いた状態であったので、甕内部に粘土を充填していた可能性は低いと見られる。

宮城県内で天井部に構築材を持つカマドの検出例としては第6表の類例をあげることができる。なお、カマドの形態は村田晃一氏の分類を参考にしている(村田晃一2000、註4)。

県内の検出例は7例であり、7世紀末頃から8世紀前半の時期のものがほとんどである。天井部に土師器甕を用いるものは1c、2b類であるが、1b、1c、2、3類は関東型と指摘されるものである(村田晃一2000)。また、同時期の関東型カマドと比較しても天井部に構築材を持つカマドは非常に客体的な存在であると指摘できる。ただし、カマド解体等に伴い、天井部などが撤去されたため確認できない事例の存在があることも考えられ、宮城県内のカマド廃棄・解体プロセスの検討も今後行う必要はある(註5)。

関東地方では東国のかまどを検討した谷句氏(谷句1982)、神奈川県のかまどを多角的に検討した奈良・平安時代研究プロジェクトチーム(奈良・平安時代研究プロジェクトチーム1997~1999、大上・依田2000)、多摩地域のかまどの規格性について検討した原智之氏(原智之2001、2002)などの論考を参考にすると、天井部に構築材を持つカマドは7世紀~10世紀までみられるものであり(註6)、宮城県内の類例が7世紀末頃から8世紀前半という時期に集中して検出されていることは、関東



第16図 カマド復元想定図

遺跡名	カマドの位置	検出状況	カマドの形態	規格（幅、長、焚き口部の高）	出土遺物	年代	文献
中田郷中遺跡 S12住（仙台市）	北壁 中央	側壁に甕2、天井に甕3、ほぼ原位置を保つ	1c類、2つ掛け	0.55m、1.00m以上、約0.21m	須恵器环、土師器环（関東系）、甕（在地、関東系）、鐵、石製品	7世紀末～8世紀初	仙台市教育委1983
東山遺跡 S1432住（宮町）	北壁 中央	側壁に白色粘土上に甕2、天井に甕3、カマド側壁前面に崩落	1c類	0.50m、0.80m以上、不明	須恵器环、土師器环（在地、関東系）、甕（在地、関東系、在地？）	8世紀前半	宮多研1992
御駒堂遺跡 6住（志波郡町）	北壁 中央	側壁に白色粘土上に甕2、天井に甕3、カマド側壁前面に崩落	2a類（2b類？）、支脚あり	0.50m、1.35m、不明	須恵器环、土師器环（関東系）、甕（関東系）	8世紀前半	宮城県教委1982
御駒堂遺跡 29H6（志波郡町）	東壁 中央	側壁に白色粘土上に甕2、天井に甕3、カマド側壁前面に崩落	2b類、支脚あり	0.50m、1.05m、不明	土師器环（関東系）、台付鉢（関東系）、甕（関東系）	8世紀前半	宮城県教委1982
御駒堂遺跡 41住（志波郡町）	北壁 中央	側壁に白色粘土上、天井に甕1、カマド側壁前面に崩落	2b類、支脚あり	0.30m、0.90 m、不明	須恵器环、甕、土師器环（在地、関東系）、鉢（関東系）、甕（関東系）	8世紀前半	宮城県教委1982
伊治城跡 SI357（船橋町）	西壁	側壁白色粘土上に天井に甕1、カマド焚口部内に崩落	1c類、支脚？	1.4m、1.7m、不明、槽道部40mm	須恵器环、高台环、双耳环、円面碗、土師器环（ナデ、赤内腹）、甕、輪先、鉄滓	9世紀前半（伊治城3期）	栗駒町教委1995
長根道跡 1住（郷町）	北壁 中央	側壁削り出し、天井部に甕3、ほぼ原位置を保つ	2b類	0.64m、1.71m、約0.20m	土師器环（関東系）、甕（関東系）、铁製品	8世紀前葉	本書

第6表 宮城県内のカマド天井部に土師器を用いる類例（註7）

地方から移住した人々が生活していたことを遺構からも示すものと考えられる。

### （3）主柱穴

主柱穴は3個検出された。ピット1、2は床面で3a・b層（大別2層）類似の抜き取り痕を確認したが、ピット3では確認することができなかった。これは、ピット3が床面よりも高い位置で切り取られたため、床面に抜き取り痕跡が残存しなかったものと見られる。

特徴として柱痕跡の平面形が隅丸長方形であり、柱痕跡は長軸方向を住居跡の中心に向けていることがあげられる。県内の類例では柱痕跡は円形のものがほとんどであるが、隅丸長方形の柱痕跡を持つものもある。類例として田尻町新田柵跡推定地SI64住居跡、SI73a住居跡（田尻町教育委員会1998）八幡遺跡1号住居跡（宮城県教育委員会1991）、金鑄神遺跡10号住居跡（宮城県教育委員会1992）栗駒町長者原遺跡20・29・37号住居跡（栗駒町教育委員会1994）、大和町一里塚遺跡47次調査SI01・08・10・29・14a・14b・15・16・19・36・39・42・44・49・51・52・53号住居跡（宮城県教育委員会1999）、仙台市中田南遺跡21・24号住居跡（仙台市教育委員会1994）、名取市清水遺跡第32号住居跡（宮城県教育委員会1981）、亘理町宮前遺跡2・45号住居跡（宮城県教育委員会1983b）がある（註8）。

時期的には古墳時代前～中期の宮前遺跡、7世紀後半から8世紀初頭の一里塚遺跡47次調査をはじめ奈良・平安時代の諸遺跡で使用されている。類例のうち、4ヵ所確認された主柱穴の1つのみが隅丸長方形に近いものも含んでいるが、自然堤防上の調査で主柱穴材が残存していた一里塚遺跡47次調

査や仙台市下飯田遺跡SI9・SI14堅穴住居跡（仙台市教育委員会1995）では丸材とともに割材、分割材が使用され両者が併存して使用されていることから、類例あげたものもその可能性がある。

今回集成を行った目的として隅丸長方形の柱材と関東系土師器との関係を検討するためであった。関東系土師器が出土した一里塚遺跡第47次調査地点では検出された住居跡45棟のうち17棟に用いられ主体となっているが、他の類例では関東系土師器との関係は明瞭に捉えることはできなかった。また、県内のすべての住居を確認したわけではないが古墳時代前期・中期から古代にかけて用いられていましたとみられ、古墳時代後期（6世紀代）の住居跡での確認例がなく連続性については言及できないが宮城県内における主柱材は丸材や分割材を用いていたことが考えられる。このことから関東系土師器が出土した一里塚遺跡47次調査地点の集落では主体的であるが、関東系土師器が出土する集落に特徴的に見られるものではないと考えられる。今後調査時に主柱穴の形態に注意するとともにさらに検討を加える必要がある。

#### （4）貯蔵穴状ピット

貯蔵穴状ピットはカマド左側脇に位置する。長軸0.77m、短軸0.65m、深さ0.18mで、最下層は埋め戻されており掘り方理土と見られる。遺物は掘り方理土から土師器壊破片が出土しているのみである。貯蔵穴状ピットは板材の抜き取り痕と重複し、これより古い。板材抜き取り痕では板材の痕跡自体は確認することはできず、貯蔵穴状ピット上にも板材が位置したかどうかは不明である。しかし、貯蔵穴状ピットは住居廃絶後板材を抜き取る際にはほぼ自然に埋没していたと考えられる。

#### （5）ピット4（カマド前面のピット）

ピット4はカマド前面に位置するもので、楕円形で径0.30×0.44m、深さ0.17mを計る。堆積土には焼土、炭化物をまばらに含むことからカマドに関わる機能を持つものと見られる。カマド崩落土に覆われることから、カマドと同時に機能したものであろう。類例として東山遺跡SI431住居跡のピット2（宮城県多賀城跡調査研究所1992）をあげることができるが具体的な機能は不明である。

#### （6）床面中央の焼け面

床面中央には0.35×0.50mほどの不整形の焼け面が確認された。明瞭な掘り込みは見られず、周辺からの遺物の出土もないが、住居跡中央付近で何らかの作業が行われたものと考えられる。

#### （7）集落構造

2号土塙は方形を基調とするが、堆積層はやわらかく、1号住居跡堆積層とは異なるため積極的に住居跡とすることができない。したがって、住居跡は1棟のみの検出となり、面的な調査を実施できていないため集落構造の詳細は不明といわざるをえない。遺物出土量が少ないため同時期であると明確には断言できないが、1号住居跡は沢No.1の沢頭付近に位置することから、丘陵平坦面付近の沢頭周辺に住居跡が散在して分布する可能性もある（註9）。この場合瀬峰町大境山遺跡などで検出された丘陵斜面に住居が数棟集まり散在するという集落の立地のあり方（瀬峰町教育委員会1983）とは異なる可能性も考えられるため、今後周辺の調査により集落構造を解明する必要があろう。

### 3.まとめと課題

以上の検討から、長根遺跡1号住居跡は8世紀前葉のもので、土器（供膳具、煮炊具）だけでなくカマドなどの住居構造についても関東地方の影響が考えられた。したがって、関東地方から土器だけが移動したのではなく、人が移住し生活を行っていた可能性が高い。8世紀前葉における宮城県北部への移民に関わるものと考えられ、『続日本紀』靈亀元（715）年5月庚戌（30）日条の「移相模。上総。常陸。上野。武藏。下野六國富民千戸。配陸奥焉。」という記載との関連が注目される（黒板勝美編1935）。今泉隆雄氏によれば富民千戸は20郷分で約2万人にあたり、平安時代の『和名類聚抄』によると黒川以北十郡は32郷で構成されることから多数の人々が陸奥国に移住してきたことが指摘されている（今泉隆雄1988、2003）。陸奥国のどの郡へ移させたかについて具体的な記載がなく不明であるが、宮城県北部で多くの関東系土師器が出土することからこの地域が移民の対象地の1つであったと考えられる。長根遺跡1号住居跡がこの記事と直接かかわるものであるかは周辺での面的な調査を行い、出土遺物や集落の構造、変遷について検討を加える必要がある。

ところで、長根遺跡の南側約4kmには8世紀前半には創建されていたとみられる田尻町新田柵跡推定地（宮城県教育委員会1991、田尻町教育委員会1998、2000～2002）が所在することから、長根遺跡は新田柵跡推定地外郭施設の北側周辺に分布する住居群（宮城県教育委員会1991、田尻町教育委員会1998）や遺構に伴わない状況ではあるが瀬峰町大境山遺跡（瀬峰町教育委員会1983）、民生病院裏遺跡（瀬峰町教育委員会1989）、下富前遺跡（註11）、高清水町「外沢田B遺跡」（本書参照）では7世紀後葉～8世紀初頭頃から8世紀中頃の関東系土師器が出土している。7世紀後葉～8世紀初頭頃にかけての関東系土師器が出土することから、靈亀元（715）年の移記記事以前には関東地方から人々が来ていることとなる。黒川以北十郡となる地域や瀬峰町周辺の諸遺跡や志波姫町御胸堂遺跡、山ノ上遺跡などの律令国家の周縁部に移民を行い、その後に建都や城柵官衙遺跡の造営によって律令国家に組み入れていったと考えられるが、宮城県内（特に北部）や岩手県南部における関東系土師器が出土する集落の分布の確認やその集落の規模、構造、変遷及び関東地方からの移民以前と以後の在地社会の様相などの解明及び検討は今後の課題であると考えられる。

### 註

註1 関東系土師器の研究は、村田晃一氏により総括的にまとめられている（村田晃一2000）。

註2 平成15年2月8・9日古川市で開催された第29回古代城柵官衙遺跡検討会の際、鳥羽政之氏、市川淳子氏（埼玉県同郷町教育委員会）、金子彰男氏（埼玉県神川町教育委員会）、中島広顕氏（東京都北区教育委員会）、松本太郎氏、松田礼子氏（千葉県市川市教育委員会）に実見していただいた。その際の見解を総合すると南武藏や下総では類似するものではなく、北武藏のものに類似するのではないかというご教示を得ている。なお、表A2は口縁部断面が四角であり、在地土師器の影響によるものとも考えられるが、埼玉県本庄市今井G遺跡2号住居跡と立野南遺跡2号住居から出土した土師器瓶や甕（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団1985、第12図53、第13図55、第67図48、第68図53など）は実測図で見る限り口

縁部断面が四角に近いので、必ずしも在地土師器の影響とはいえない可能性がある。

註3 宮城県内の古代住居跡の報告例ではカマドの平面形の規模については記載が見られるが高さについての報告例はほとんどなく、一部にセクション図、エレベーション図がみられるのみである。宮城県内ではカマドを立体の構造物として報告する視点が欠けているのではないかと思われる。筆者にもこの視点は欠けていた。高さについての記載がないため近年研究が行われはじめた高さを含めたカマドの規格性を検討する研究（原智之2001、2002）など新たな視点での研究では非常に不便である。カマドは住居廐室に伴う廐斎儀礼により破壊されたり、後世の削平により残存状況が良好ではないものが多いが、①壁高が十分に残存し、カマド側壁が良好な状態の場合、②カマド側壁構築材に土師器甕、瓦、礪が用いられる場合、③焼失住居で各施設が良好に残存する場合などは高さについての記載やセクション図あるいはエレベーション図は必要であると考える。なお、宮城県内でカマドの焚き口部の高さを想定しているものとして、第6表内の仙台市中田畠中遺跡S12号住居跡のほかに、仙台市栗道跡18号住居跡があり約20cmと想定されている（仙台市教育委員会1982）。

註4 村田晃一氏は以下のように分類している。

- 1類 住居内部にカマドを構築し、壁外に煙道が延びるもの。b類は本体を白色粘土で構築。c類は焚口部を土師器甕で補強。それ以外がa類。
- 2類 住居壁を掘り込みカマドを構築し、その最奥部に煙道の機能を持たせるもの。燃焼部は壁付近もしくは壁外。b類は焚口部を土師器甕で補強。それ以外がa類。
- 3類 住居壁を掘り込みカマドを構築し、その先に煙道が設けられるもの。燃焼部は壁付近もしくは壁外。この内、1a類は東北地方に普遍的に見られるもので、1b・1c・2・3類は関東地方に系譜が求められるものとして、関東型カマドと呼称している（村田晃一2000、61頁）。

註5 関東型カマドの分析例（村田晃一2000）や各集落での分析例はあるが、県内全域の時期別や地域別、系譜の問題を扱った分析例はほとんどない。

註6 上記の文献等によれば、栃木県真岡市井頭遺跡1区17号住居跡（栃木県教育委員会1974）、宇都宮市上神主・茂原遺跡S1～2C（（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター2001）、鹿沼市西山遺跡S1～5（（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター1998）、埼玉県本庄市今井川越田遺跡第286号住居跡（（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997）、同郡六反田遺跡A区第51、55a号住居址、C区第116、138、143号住居址（六反田遺跡調査会1981）、群馬県群馬町三ツ寺Ⅱ遺跡5区36号住居跡（（財）群馬県埋蔵文化財事業団1991）、東京都八王子市郷田原遺跡16号住居、大原D遺跡26号住居、府中市武蔵国府関連遺跡M45～SI15、M44～SI30、日野市落川遺跡25、342号住居跡（日野市落川遺跡調査会1996）、町田市なすな原No.2遺跡第18、42号住居址（なすな原遺跡調査会1996）、新宿区下戸塚遺跡83、85、90（、109）号住居跡（早稲田大学校地理埋蔵文化財調査室編1995）、神奈川県秦野市草山遺跡、横浜市上谷本第2遺跡、海老名市上浜田遺跡S1053（神奈川県教育委員会1978）などの類例がある。ただし、文献名のないものは報告書を参照することはできず、関東地方での類例の探索が出来ていない地域もある。なお、福島県や出羽にも類例があることを菅原祥夫氏、村田晃一氏よりご教示いただいた。

註7 御胸堂遺跡6号住居跡は報告書内では明確に天井部に土師器甕をもつとの記述はない。カマド内から多数（少なくとも5個体）の土師器甕が出土し、そのうち2個体が口縁部と底部を連結させた状況であるという記述（宮城県教育委員会1982、336頁）とともに写真より判断し、表には掲載した。しかし、詳細が不明であるため除外して考えても良いと思われる。このほか、名生館官衙遺跡第24次調査S11629号住居跡（古川市教育委員会2002b）でも検出されている。

## V. 考察

- 註8 吉川市名生館官衙遺跡SI1214住居跡、SI1278住居跡、仙台市郡山遺跡第15次SI143住居跡、第99次SI1400竪穴住居跡、栗遺跡16号住居跡、名取市清水遺跡第35・59号住居跡、山元町糸塚遺跡第13号住居跡なども遺構平面図では柱痕跡が隅丸長方形の可能性もあるが、円形に近いものや掘り方底面を図示しているものもあるので除外した。
- 註9 集落と同時期であるという積極的な資料を得ることはできていないため断言しかねるが、今年度下水管布設に伴い工事立ち会いを実施し沢を検出した清水山I遺跡（8世紀後半の住居が主体、昭和61年度調査、瀬峰町教育委員会1985、阿部・赤沢・佐藤1987）でも丘陵平坦面付近の小規模な沢頭堤辺に住居が広がる可能性はある。
- 註10 この付近は江戸時代に栗原郡中村と呼ばれ「中村」という地名が新田郡仲村郷の遺存したものとの見解がある（鈴木玄雄1922、高橋富雄1963）。ただし、文字資料の出土がなく考古学的に証明されているわけではない。
- 註11 平成11年度調査（第2次調査、瀬峰町教育委員会2000）2区表土から出土したもので未報告資料である。平成14年12月に下富前遺跡出土遺物の再検討を行った際確認した。平成15年度刊行の報告書内で資料報告を行う予定である。

## VI. 濑峰町大里地区で採集された遺物について

### 1. はじめに

瀬峰町大里地区の一部、江戸時代に中村と呼ばれた地域（註1）は蕉栗沼に東流する小山田川および萱刈川に挟まれた四ッ壇原丘陵とそこから派生する小丘陵上（荒町丘陵）にある。今回報告を行った長根遺跡はこの標高約20m前後の低平な丘陵に位置している。昭和30年代以降、低丘陵のため利便性が高いことから土地の有効利用を目的とする小開発が行われ、各遺跡では浸食を余儀なくされている。

ここではこれらの各遺跡を踏査した際に採集した遺物や平成12年12月役場倉庫内より確認された昭和41年度刊行の『瀬峰町史』編纂時に収集された遺物、平成10年10月前瀬峰町文化財保護委員長佐々木尚見氏、平成13年7月に元瀬峰町公民館長故佐々木徳雄氏より寄贈していただいた遺物などの中から大里地区採集遺物の内、特に古代を中心として資料紹介を行ないたい。これら寄贈された遺物は、瀬峰町の埋蔵文化財台帳整備が開始された初期に採集されたもので、遺跡登録の基礎となった資料である。

本稿は資料紹介を目的とするため、詳細な分析は後日行うこととする。なお、遺跡の内容を示すと考えられる遺物の一部を図化するにとどめた。その他の遺物については、後日改めて紹介していきたいと考える。

### 2. 採集された遺物について

#### （1）神田遺跡から採集された遺物

神田遺跡（遺跡登録番号46063、第2図49）は瀬峰町役場の南西約3.3km、四ッ壇原丘陵中央付近に位置する。標高約24～28mの北斜面に立地し、東西約240m、南北約300mほどが現在のところ遺跡の範囲と考えられる。遺跡は、昭和30年代以降の開田により階段状となり残存状況は良好ではない。遺跡南東部の道路法面ではかって堅穴住居跡が見られたというが現在確認することができない。また、開田の際多数の土器が出土したというが現在遺物は若干しか採集することはできない。現在までに採集されている遺物には土師器、須恵器、瓦、近世陶器があり、奈良・平安時代の遺跡と考えられる。

軒平瓦（第18図3）、平瓦（第18図4、5）を図示した（註2）。軒平瓦の瓦当面はヘラ描き重弧文、顎部に山形文がみられ、凹面は糸切り痕が観察される。凹面の調整は残存せず不明である。多賀城跡出土軒平瓦511類とみられ（宮城県多賀城跡調査研究所1982）、胎土や色調から田尻町木戸窯跡（野崎準1976、田尻町教育委員会2001c）で生産された多賀城創建期ころの8世紀前半頃のものと考えられる。かつて多量の瓦が出土したとの話もあり瓦窯跡の可能性も考えられている（瀬峰町教育委員会1977）が、田尻町木戸窯跡周辺の集落である田尻町金鑄神遺跡（宮城県教育委員会1992、田尻町教育委員会2001b）と同様に集落内で使用されている可能性もある。

## VI. 潤峰町大里地区で採集された遺物について

### (2) 伊勢堂館跡から採集された遺物

伊勢堂館跡（遺跡登録番号46005、第2図5）は潤峰町役場の南西約3km、四ッ壇原丘陵中央付近から北側に舌状に張り出した小丘陵にあり、標高約18～22mである。東西約180m、南北約200mほどが遺跡の範囲と考えられる。遺跡は昭和50年代まで墓地として利用されていたが、現在荒地となっている。この旧墓地内には低い土手を見ることができ、これが遺跡内を区画する土塁であり、館跡と考えられていたが、踏査等を基に検討を行ったところ現在では館跡である可能性は極めて低いと考えている。また、遺跡内には径10m前後の方形塚1基を確認できる。遺跡東側は畑地、南側は墓地、田地となっており、畑地から遺物を採集することが可能である。南側は墓地となっているが、それ以外の地点の残存状況は比較的良好である。現在までに採集されている遺物には縄文時代の石器、土師器、須恵器があり、縄文時代、古代の複合遺跡であると考えられる。

平瓦（第18図6）、須恵器甕口縁部破片（第18図2）を図示した（註3）。

### (3) 四ッ壇遺跡から採集された遺物

四ッ壇遺跡（遺跡登録番号46002、第2図2）は潤峰町役場の南西約2.9km、四ッ壇原丘陵中央付近丘陵頂部平坦面から北側斜面に立地する。標高約22mである。現在、4基の塚が見られ、源義家が築いたとの伝承があるが、詳細な時期、性格は不明である（佐藤・阿部・赤沢・佐藤1987）。南から2番目の塚である摩利支天塚の西側は開田により若干削平を受けていると見られるが、遺物を採集することができる。また、塚の北側にある畑地でも若干はあるが古代の遺物を採集することができる。

第17図7～9は須恵器である（註4）。いずれも胎土、焼成は類似しており、同一の窯で焼成されたもの可能性が高い。調整や器形などから8世紀中葉～後半頃のものと考えられる。

### (4) 四ッ壇原遺跡から採集された遺物

四ッ壇原遺跡（遺跡登録番号460021、第2図13）は潤峰町役場の南西約3.5km、四ッ壇原丘陵中央付近丘陵頂部平坦面から南側斜面に立地する。標高約15～28mである。東西約550m、南北約350mが遺跡の範囲と考えられており、町指定史跡樹形館跡はこの遺跡内に含まれる。遺物は縄文時代の石棒、奈良・平安時代の土師器・須恵器が採集されている。須恵器のみが集中的に採集される地点もあり、また、かつて鉄刀が出土したとの話がある。なお、調査は平成2年町道拡幅工事、平成5年工場建設に伴い確認調査が実施されている。

須恵器長頸壺（第18図1、註5）を図示した。

### (5) ニッ谷遺跡から採集された遺物

ニッ谷遺跡（遺跡登録番号46035、第2図27）は潤峰町役場の南西約2.3km、四ッ壇原丘陵中央付近丘陵から北側に舌状に張り出した丘陵斜面に立地し、遺跡中央には幅の広い沢がある。標高約15～20mで東西約400m、南北約250mが遺跡の範囲と考えられている。柴田薰氏宅東側法面に竪穴住居跡を確認することができ、かつて多数の土器や土玉が出土したという。周辺の畑地では現在でも古墳時代～古代の遺物を採集することができる。また、遺跡範囲の東側では縄文土器の散布も認められる。現在までに縄文土器、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、近世陶磁器が採集されているので、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、近世の複合遺跡とすることができます。

土師器甕、高坏、器台（第17図1～3）、須恵器坏（第17図11、13）を図示した（註6）。土師器は特徴から古墳時代前期、塙釜式（氏家和典1957）のものと考えられる。13はゆがみが著しく、残存状況も良好ではないため、本来の形態かどうかは問題がある。

#### （6）泉谷遺跡から採集された遺物

泉谷遺跡（遺跡登載番号460023、第2図15）は瀬峰町役場の南約2.6km、四ッ壇原丘陵突端付近に位置する。標高約3～10mである。東西約260m、南北約100～260mほどが現在遺跡の範囲と考えられる。遺跡は、現在田地、宅地となり、特に田地は階段状に開田されており、残存状況は良好とはいえない。遺物は数地点で集中して発見されており、大泉こいそ氏宅北側畑地では灰白色火山灰と見られる落ち込みが発見されている。縄文土器、石器（註7）、古墳時代前期～中期の土師器、黒耀石製石器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、中世陶器などが採集されており、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡である。調査は平成元年度に農林漁業用揮発油税財源身替農道事業に伴う事前調査、平成7、8、14年度に造成に伴い工事立ち会いを実施している。事前調査では近世墓、時期不明の土塁、溝跡、水田跡などが検出されている（瀬峰町教育委員会1989）。

土師器坏、高坏（第17図4、5）、中世陶器（第19図1、2）を図示した（註8）。土師器は特徴から古墳時代中期、南小泉式（氏家和典1957）の土師器と見られる。第19図1は中世陶器裏頸部破片である。無軸陶器で器形などから東海地方産のものであろう。口縁部が欠損するため詳細な時期は不明であるが、赤羽・中野生産地編年の3期（13世紀前半）ころのもの（中野晴久1995）と見られる。

#### （7）荒町遺跡から採集された遺物

荒町遺跡（遺跡登録番号46020、第2図12）は瀬峰町役場の南西約2.6km、荒町丘陵の中央付近に位置し、標高約10～22mを計る。東西約400m、南北約300mほどが現在のところ遺跡の範囲と考えられる。現在までに古墳時代中期の土師器（註9）、奈良・平安時代の須恵器、土師器、瓦、中世陶器、近世陶磁器、鏡、古銭が採集されており、古墳時代から近世までの複合遺跡と考えられる。遺跡内に所在する水色山虎渓寺の西側畑地には古代の遺物が濃密に散布し、その他の地点でもまばらに散布している。中世の遺物は虎渓寺境内及びその東側で採集されており、範囲を限定することが可能である。なお、虎渓寺境内には5基の板碑、近世の「鶯」碑が所在しており（瀬峰町教育委員会1988）、板碑は周辺から集められたものが多い（註10）が、この地域における中世の人々の活動を示すものであろう。調査は昭和51年近世墓の調査（佐藤信行1976）、昭和63年度虎渓寺南東に隣接する地点で防火水槽設置に伴い工事立ち会いが実施されている。

須恵器坏（第17図12）、中世陶器擂鉢（無軸陶器、第19図4）を図示した（註11）。

#### （8）王墳遺跡から採集された遺物

王墳遺跡（遺跡登録番号46001、第2図1）は瀬峰町役場の南西約3.2km、荒町丘陵中央付近に位置する。標高約15～26mに立地し、東西約600m、南北約150mほどが現在のところ遺跡の範囲と考えられる。遺跡は田地、畑地、森林であり、階段状に開田され残存状況は良好ではない。遺物の散布は南側斜面に広く見られるが、集中的に発見される地点もある。特にほぼ旧地形が残存すると考えられる王墳1号墳周辺の畑地では多くの遺物を採集することが可能である。王墳遺跡には10数基の塚が

## VI. 潤峰町大里地区で採集された遺物について

あったといわれるが、現在2基確認されるのみである（佐藤・阿部・赤沢・佐藤1987）。1号墳は径30m前後の方形塚であるが（註12）、塚に伴うと見られる遺物の採集がなく詳細な時期は不明である。今後測量調査やレーダー探査などにより基礎資料を整備する必要があろう。また、王塚1号墳より約200m西側には高さ1mほどの土手により囲まれた江戸末から明治頃のものといわれる馬場跡（長軸約60m、短軸約17m）がある（註13）。遺跡内からは現在までのところ、奈良・平安時代の土師器、須恵器、赤焼き土器が採集されていることから、奈良・平安時代、近世の複合遺跡とすることができる。採集された遺物を見ると平安時代のものが多い傾向がある。

須恵器（第17図10）、赤焼き土器壺（第17図14）を図示した（註14）。

### （9）中三代遺跡から採集された遺物

中三代遺跡（遺跡登録番号46049、第2図39）は潤峰町役場の南西約3.2km、荒町丘陵からさらに派生する小丘陵突端付近に位置する。標高約15～18mに立地し、東西約500m、南北約200～300mほどが現在のところ遺跡の範囲と考えられる。北側には小山田川及び沖積地が広がる。遺跡は田地、畠地、宅地、林地であり、田地は階段状に開田され残存状況は良好ではない。遺物の散布は全体に少ないが数地点から集中的に発見される。昭和50年代に側溝工事の際、住居跡と見られる遺構が発見された地点付近では現在でも遺物の散布量が比較的多い。また、詳細な地点は不明であるが、宅地造成の際にも土器が出土したという（註15）。古代の土師器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器が採集されており、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡と考えられる。調査は平成12年度に工場建設に伴い確認調査、工事立ち会いを実施している。また、平成14年度にも隣接地点で工事立ち会いを実施している（第20図）。

中世陶器甕底部片（無軸陶器、第19図5）は底部の調整や胎土から在地産と見られる（註16）。

### （10）三代遺跡から採集された遺物

三代遺跡（遺跡登録番号46019、第2図11）は潤峰町役場の南西約3.7km、荒町丘陵からさらに東に派生する小丘陵突端付近に位置する。標高約10mに立地し、東西約250m、南北約280mほどが現在のところ遺跡の範囲と考えられる。北側には小山田川及び沖積地が広がる。遺跡は宅地、田地、畠地となり、残存状況はあまり良好ではない。遺物の散布は全面に広がるものではないよう数地点から集中的に発見される傾向がある。現在確認している地点として高橋亀寿吉氏宅庭、川前集会場西側畠地などである。特に高橋亀寿吉氏宅庭からはかつて須恵器壺が5～6個重なって発見されたことがあるという。採集された遺物には土師器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器などがあり、古墳時代後期（阿部正光1983）、奈良・平安時代、近世の複合遺跡と考えられる。

土師器小型短頸壺（第17図6）、須恵器甕（第19図6）、中世陶器甕（無軸陶器、第19図3）を図示した（註17）。小型短頸壺は全体に摩滅を受けているが、ロクロを用いて整形を行っていると思われ、外面はヘラミガキ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理される。摩滅のため底部調整などは不明である。県内の類例は共伴関係が判然としないが回転ヘラ切りの須恵器壺の出土より8世紀後半頃と考えられる古川市小野横穴墓群朽木橋支群5号墓出土の須恵器小型短頸壺（註18）がある。三代遺跡出土遺物の詳細な時期は採集品のためセット関係が判明せず、県内でも類例が少ないと明確だが、

器形や法量などから奈良三彩小壺を模倣したもので、8～9世紀代のものと想定される。関東地方では仏具と考えられ各県毎に集成されており、それぞれ約80個体、総数約300前後の類例が報告されており、東北地方とは異なり普遍的に出土するものである（考古学から古代を考える会2000、註19）。

### 3. まとめ

前章では瀬峰町大里地区（小山田川以南）で採集された遺物について紹介を行った。現在までに確認調査などを実施できていないが、資料紹介により各遺跡の時代、年代、性格の一端を提示できたものと考える。特に四ッ壇遺跡・伊勢堂館跡・神田遺跡・四ッ壇原遺跡は奈良・平安時代の遺物が採集され、一連の集落跡の可能性が高い。荒町遺跡・長根遺跡・王壇遺跡・三代遺跡・中三代遺跡なども同様に捉えることが可能であろう。また、各遺跡間の遺跡未確認地点については、低平で北斜面でも日当たりの良い丘陵であるということを考慮すると今後とも注意が必要である。

今回詳細な分析は行うことができなかつたが、小山田川周辺の諸遺跡について、今後も分布調査、確認調査等を実施して内容を明らかにしていく必要がある。

### 註

註1 「中村」が新田郡仲村郷の遺存したものという指摘があることは前述した。

註2 昭和51年6月17日故佐々木徳雄氏により遺跡内に所在する桟の木（現存）の東方約100m付近で採集されたものである。

佐藤信行1976、瀬峰町教育委員会1977にこの軒平瓦の記述が見られる。

註3 平成11年12月21日に伊勢堂館跡南東側畑地で暗渠管布設を行っているのを発見し、その廃土中より採集したものである。瓦を採集した付近の廃土では焼土、炭化物粒を含んでいた。布設溝の断面観察を行ったところ畑地造成に伴う盛土層内に類似する土層が認められたことから、周辺には住居跡などが存在するのかも知れない。

註4 町史編纂時採集資料であり、昭和35年春に佐々木城氏により摩利支天塚付近より採集されたもので、横1966、552頁、No.3、4に該当する。

註5 瀬峰町教育委員会1977、7頁、第4図7を再実測したものである。ネーミングより昭和50年10月15日に柳形館跡東側の畑地より採集されている。

註6 土師器は町史編纂時に採集されたもので、鉛筆で「二つや」のネーミングがある。須恵器は平成元年度文化財パトロールの際の資料であるが、柴田薰氏に伺ったところ、数点の遺物を教育委員会に寄贈したことである。記録がなく確認することができないが、この須恵器が寄贈資料に該当する可能性がある。

註7 元瀬峰町文化財保護委員飯塚義則氏によれば愛宕神社付近でかつて石棒、石皿などが出土したという。

註8 土師器は平成元年度調査時に表採あるいは表土より出土したものである。中世陶器は故佐々木徳夫氏採集資料、文化財パトロール時の採集資料である。

註9 昭和58年度文化財パトロールの際、古墳時代の須恵器腹が採集されている。現在、実測図は確認できるが遺物の所在を確認できない。

註10 現在確認できる5基は、いずれも瀬峰町牛湧地区から運ばれてきたものや現位置が不明なものである。ただし、虎溪寺

## VI. 濑峰町大里地区で採集された遺物について

西方約50mの加茂神社跡付近から、天蓋、壇塔のある板碑が出土している（現在所在不明）。

註11 積恵器は昭和63年度防火水槽設置に伴う工事立ち会い時に出土したものである。中世陶器は平成12年4月1日虎渓寺と南側駐車場の間にU字溝を設置した際の廃土から採集したものである。

註12 平成10年度文化財バトロールの際の聞き取りによるとかつて、盜掘を行った際玉が出土したといわれている。また、地元では石榴があるとの言い伝えもあるようである（高橋実1993）。

註13 平成8年度の文化財バトロールの際の聞き取りによる。

註14 故佐々木徳雄氏により昭和53年4月1日に飯綱神社北側の草地より採集されたものである。

註15 平成12年度工場地造成に伴う確認調査、工事立ち会いの際、地元の方より伺った。

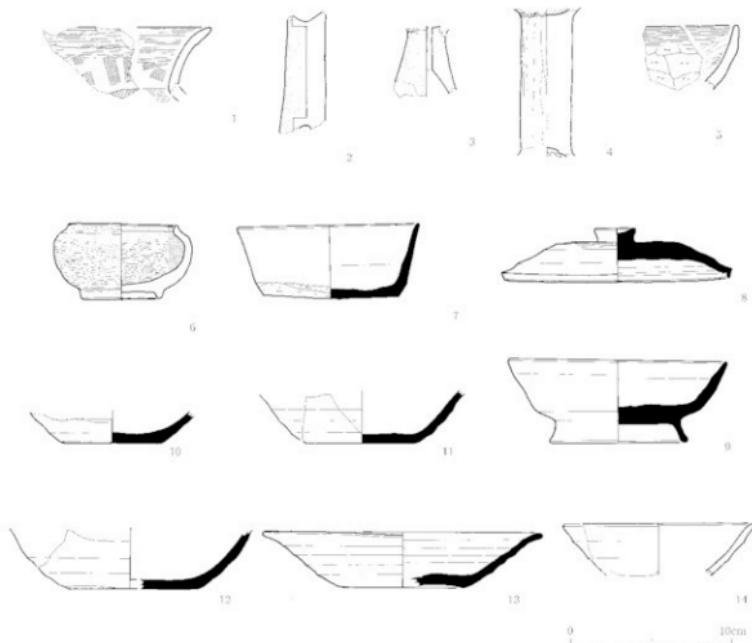
註16 平成12年度工場地造成に伴う確認調査、工事立ち会いの際、1号井戸跡（近代以降）上層より出土したものである。

註17 第17図6は横1966、522頁、No.5に該当するものである。土師器、須恵器はいずれも瀬峰町大里字中三代、故高橋龜寿吉氏（現捷一郎氏）宅内出土の墨書きがある。但し『町史』には白鳥明神跡付近から出土したものとある。中世陶器は故佐々木徳雄氏採集資料である。

註18 宮城県教育委員会1983a、11頁、第8図2。

註19 但し、この集成では遺物の種別（須恵器、土師器）の記載がなく、また、遺跡の性格の記載もないため、どのような性格の遺跡から出土しているのか原典を確認する必要がある。

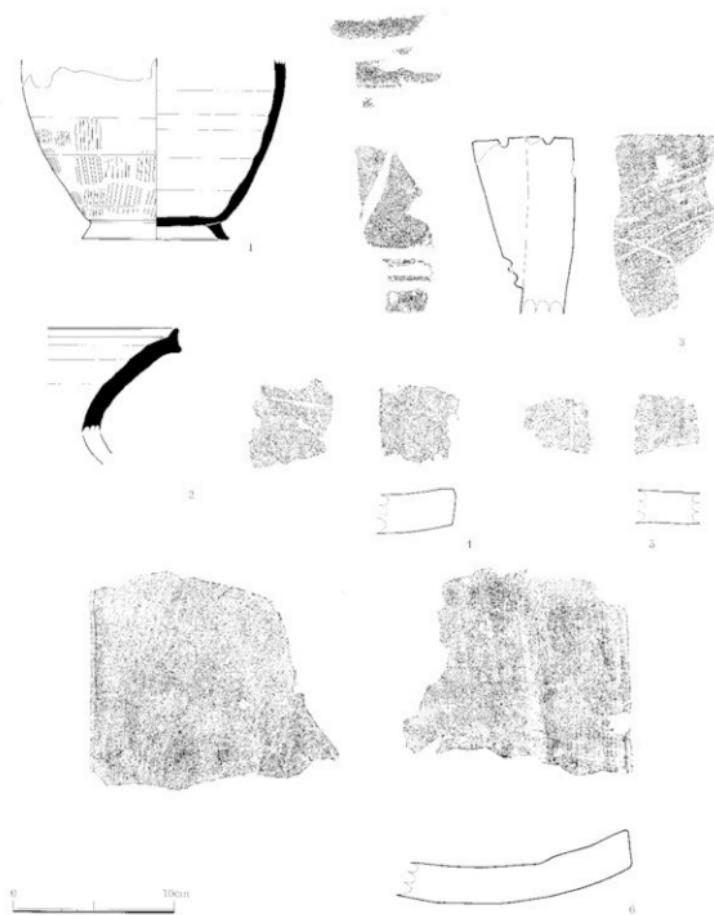
・



No.	遺物名	遺物名	内寸	断面	口径	底径	特徴	回数
1	二ツ谷遺跡	上輪目盤	口 縁	直	—	—	外：縦ナギ、ハケヌ、窓合口縁、口部切妻（G3YR6/9）、内：縦ナギ、ハケヌ、ナギ、縫（G3YR6/6）	—
2	二ツ谷遺跡	上輪目高杯	縫	縫	—	—	外：縦縫、施灰（G3YR6/1）、内：縦縫、中縫、施灰（G3YR6/1）	—
3	二ツ谷遺跡	上輪目折沿	縫	縫	—	—	外：ハケヌ、縫縫、口部切妻（10YR6/4）、内：ナギ、縫縫、施灰（10YR6/2）	—
4	東山遺跡	上輪目高杯	縫	縫	—	—	外：ハケヌ、施縫など口縁、口部切妻（10YR6/2）、内：ナギ、縫縫、中縫、口部切妻（10YR6/2）	—
5	東山遺跡	上輪目	縫	縫	—	—	外：縦ナギ、ナギ、縫縫、口部切妻（10YR6/8）、内：縦ナギ、上縫ナギ、縫（2.5YR6/8）	—
6	二代遺跡	上輪目	縫	縫	—	—	外：縦ナギ、ナギ、縫縫、口部切妻（10YR7/4）、内：ナギ、縫縫、中縫、黑色施縫、施灰（NS7）	6-1
7	四ツ瀬遺跡	羽毛目	完	形	4.5	11.2	8.5 外：ロクロナギ、斜輪ナギ、施灰（2.5Y4/1）、内：斜輪ナギ、内：切妻、施灰（2.5Y4/1）	6-3
8	四ツ瀬遺跡	羽毛目杯蓋	完	形	3.4	13.9	— 外：ロクロナギ、斜輪ナギ、施灰（2.5Y2/1）、内：ロクロナギ、施灰（2.5Y1/1）	6-2
9	四ツ瀬遺跡	羽毛目高台	完	形	5.1	13.5	8.1 外：ロクロナギ、施（NA4）～施灰（2.5Y4/1）、内：ロクロナギ、内：ロクロナギ、施（2.5Y4/1）	6-4
10	玉瀬遺跡	羽毛目	体～底	—	—	6.0	外：ロクロナギ、縫（2.5Y7/6）、底：回転切妻切口、内：ロクロナギ、縫（2.5Y7/6）	—
11	二ツ谷遺跡	羽毛目	体～底	—	—	7.5	外：ロクロナギ、浅施縫（10YR8/1）、底：回転切妻切口、内：ロクロナギ、浅施縫（10YR8/3）	—
12	東町遺跡	羽毛目	体～底	—	—	7.8	外：ロクロナギ、施（2.5Y6/1）、底：回転切妻切口、内：ロクロナギ、底（NS6）	—
13	二ツ谷遺跡	羽毛目	1/3	3.4	17.6	8.0	外：ロクロナギ、施（NS5）～紙白（G3YR8/1）、底：回転切妻切口、内：ロクロナギ、底（NS5）	—
14	玉瀬遺跡	水瓶き口目	口～体	—	11.6	—	外：ロクロナギ、口部切妻（10YR6/3）、内：ロクロナギ、口部切妻（10YR6/30）	—

第17図 採集された遺物（1）

VI. 潟峰町大里地区で採集された遺物について



No.	道跡名	遺物名	内存	断面	口徑	底径	特徴	回数
1	四・惟原遺跡	円底盤貝器	体～底	—	—	9.1	内：平行タケリ～ロコ、裏面：(2.5)×(2)～横幅：(2.3)、直：(1.9)切妻、ナデ、底：(2.5)内：(0.7)D、直面：(2.5)×(1)	6.5
2	伊勢堂遺跡	円底盤貝器	口縁部	—	—	—	外：ロコラグテ、底：(2.5)×(1)、内：ロコラグナデ、オリーブ黒：(2.3)×(1)	—
3	神田遺跡	平 反	—	—	—	—	内面：横脊部、系留孔、底：(2.6)、側面：ハラウラキ底、凸部：山形文、波継、横継、横幅：(2.3)～底：(2.4)	7.1
4	神田遺跡	平 反	—	—	—	—	内面：ナデ、ケズリ、底：(2.4)、側面：ケズリ、凸面：ナデ、底：(2.4)	—
5	神田遺跡	平 反	—	—	—	—	内面：横脊部、有目底～一括ナデ、底：(2.6)、凸面：ナデ、底：(2.6)	—
6	伊勢堂遺跡	平 反	—	—	—	—	内面：横脊部、有目底～スリ直し、底：(2.5)×(2)、側面：ケズリ、凸面：横タケリ、有目底～(2.1)直、底：(2.5)×(2)	7.2

第18図 採集された遺物（2）



%	遺跡名	遺物名	残存	縦高	口径	底径	特徴	回数
1	幕谷遺跡	中世陶器裏 口縁部	—	—	—	—	外：ロクロナギ、灰陶 (3YR4/2), 内：ロクロナギ、灰陶 (3YR4/2)	—
2	幕谷遺跡	中世陶器裏 体部	—	—	—	—	外：織ナギ、灰陶 (10YR5/1), 内：織ナギ、灰陶 (10YR5/1)	—
3	三代遺跡	中世陶器裏 体部	—	—	—	—	外：ナギ、輪幅赤陶 (25YR2/3), 内：払い赤陶 (25YR4/2)	—
4	尾町遺跡	中世陶器底 口～体部	—	—	—	—	外：ロクロナギ、灰陶 (10YR6/2), 内：ロクロナギ、下部は使用による摩滅板、黒 (10YR2/1)	6.6
5	中三代遺跡	中世陶器裏 底部	—	—	11.4	—	外：ナギ、明赤陶 (25YR5/6)～明赤陶 (25YR3/1), 底：板目陶、内：ナギ、灰陶 (25YR5/1)	6.7
6	三代遺跡	中世陶器裏 体部	—	—	—	—	外：平行タサギ、灰白 (DN7/7), 内：押さえ縞模（背面波紋）、織ナギ、灰 (DN7/)	—

第19図 採集された遺物（3）

## VII. 高清水町「外沢田B遺跡」採集遺物について

### 1. はじめに

瀬峰町教育委員会では、瀬峰町に隣接する高清水町外沢田地区採集の土師器を保管している。これは遺物実測団の注記によれば元瀬峰町公民館長故佐々木徳雄氏により高清水町外沢田遺跡（遺跡登録No.44008）の東方約500m付近で採集されたものである。故佐々木徳雄氏は昭和40年後半頃から昭和60年前後頃まで町内及び町外遺跡の踏査を行っており、踏査資料とともに教育委員会で保管することになったと思われる（註1）。昭和59年11月、教育委員会は文化財パトロールの際、偶然に同地點で造成が行われている事を発見し踏査を行った。その結果、桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡2棟、土塙（小堅穴造構）1基を確認し、土塙から土師器甕（国分寺下層式）を採集した。この成果については「外沢田B遺跡」（註2）として公表している（佐藤・阿部・赤沢1985、註3）。この後、周辺では平成12年7月、外沢田地区に隣接する瀬峰町大里字中三代地区で工場建設の際に保存協議資料を得るために外沢田地区も含め踏査を行ったところ、外沢田遺跡と「外沢田B遺跡」の中間付近で若干はあるが須恵器を採集した。また、平成14年12月に隣接地で倉庫建設に伴う工事立会いを実施し、土師器、須恵器が若干出土しているので、これらは一連の遺跡である可能性も考えられる。

「外沢田B遺跡」採集遺物には関東系土師器が含まれており宮城県北部における古代律令制の浸透を考える上で重要なと思われるため、資料紹介を行うこととした。



第20図 「外沢田B遺跡」の位置と周辺の遺跡

## 2. 採集された遺物について

採集された遺物4点について、それぞれの特徴をまとめ検討を加える（註4）。

第21図1、2は土師器壺である。1は丸底の底部から内窵しながら口縁部に至るもので、口縁部はやや内傾気味に短く直立する。器面調整は、外面で口縁部横ナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリ、内面は横ナデである。2は平底気味の底部から外傾しながら口縁部に至るものである。器面調整は、外面で口縁部横ナデ、無調整帯をはさみ体部から底部はヘラケズリ、内面は口縁部付近が横ナデ、見込み付近にヘラナデが見られる。いずれも器厚はあつい。器形や調整から関東系土師器と考えられる。共伴関係が不明であり、遺跡内及び周辺での関東系土師器の様相が把握できていないことから、県内における類例をもとに年代を考える。壺1に類似するものは古川市名生館官衙遺跡SI235住居跡（多賀城跡調査研究所1984）、SI1255b住居跡（古川市教育委員会1992）、SI1324住居跡（古川市教育委員会1994）、大和町一里塚遺跡第47次調査、SI07、SI14b住居跡（宮城県教育委員会1999）、矢本町赤井遺跡SI266住居跡（矢本町教育委員会2001）から出土した壺があり、7世紀後葉から8世紀初頭の年代が考えられるが、器厚が厚いことから時期が下ることも考えられる。下限は8世紀前半とされる志波姫町御駒堂遺跡2群土器（宮城県教育委員会1982）の壺ほど平底化していないことからこれより古いものと考えられるので、7世紀後葉から8世紀前葉頃の年代を想定しておく（註5）。壺2は平底風で形態の崩れが甚だしく、調整が粗雑なことから壺1より後出的な型式的特徴を持つと見られる。矢本町赤井遺跡SI429住居跡から出土した壺P<sub>1</sub>（矢本町教育委員会2001）に類似すると考えられ、県内の類例では時期が下るにつれて平底化すること（村田晃一2000）や上記の類例では土師器盤の出土などから8世紀前葉から中頃とされていることから壺2も同時期であろう。

第21図3は土師器長胴甕である。頸部付近に段を持つもので、口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、中位から外反する。口唇部断面は丸い。胴上部付近に最大径があり、胴下部では直線状であまり丸みを持たず底部に向かい細くなる。胴部は長く、器高は高い。器面調整は、外面で口縁部横ナデ、体部ハケメの後全面を縱方向に幅の広いミガキが丁寧に行われる。内面は口縁部で横ナデ、体部ヘラナデが施される。外面には口縁から胴部に粘土貼付が残存しており、カマド構築材に用いられたかあるいはカマドに設置された際の痕跡とみられる。頸部に段を持ち、長い胴を持つという器形は、8世紀前半から中頃とされる古川市名生館官衙遺跡SI1218住居跡出土遺物（古川市教育委員会1991）や全体的な器形や器面調整に若干の違いは見られるが8世紀前半とされる高清水町観音沢遺跡第10号住居跡、第12号住居跡出土遺物（宮城県教育委員会1980）などがあげられるので、8世紀前半頃の年代を中心に考えておきたい。なお、外面にミガキ調整が多用されることは東北地方北部の土師器から影響を受けたものと考えることができる。東北地方北部型土師器を検討された宇部則保氏の論考を参考にすると胴部上半に最大径を持つ甕A類（宇部則保2002）に該当すると考えられるが、これとは口縁部形態や胴部など全体の器形が異なる可能性が高い。今後この周辺での在土地上師器の様相について類例の増加を待って検討を加える必要がある（註6）。

第21図4は土師器長胴甕の上半部破片である。胴上部に最大径を持つものと見られる。外面は口

## VII. 高清水町「外沢田B遺跡」採集遺物について

クロナデ、胸部中位付近からヘラケズリが、内面はロクロナデの後ヘラナデ、ハケメが施される。器形や調整などから9世紀以降の年代が想定される。

### 3.まとめ

遺物の分析及び前回の報告から「外沢田B遺跡」について以下のようにまとめることができる。

- (1) 「外沢田B遺跡」は高清水町字外沢田117付近に所在し、標高約15~25m前後の緩やかな丘陵頂部から南側斜面に位置する。
- (2) 確認された遺構は現在までのところ掘立柱建物跡、土城がある。詳細な時期は不明であるが、おおよそ古代の年代が考えられる。
- (3) 採集された遺物には非口クロ土師器壺（関東系土師器）、非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕などがある。これらの年代から飛鳥時代から平安時代まで存続するものと考えられる。特に関東系土師器である土師器壺は7世紀後葉～8世紀中頃の年代が考えられた。長根遺跡1号住居跡出土遺物との関係は、壺1は古く、壺2は同時期かやや時期が下るもの的可能性が高いと考えられる。
- (4) 今回の知見は正式な発掘調査のものではないため、今後発掘調査を通して遺跡の規模、内容を確認していく必要がある。この際、多賀城創建期の軒瓦、平瓦が採集されている外沢田遺跡、漸峰町王塙遺跡、中三代遺跡、三代遺跡などの規模、内容の確認も重要なものと考えられる。

### 註

註1 内面に「78.3.30 高清水町」のネーミングがあるが、No.1～3が同日に採集されたものは不明である。なお、No.1～3は昭和59年10月の段階には既に実測図が作成されていることから、これ以前に採集されている。漸峰町教育委員会には昭和59年10月25日平川南氏（国立歴史民俗博物館）、柿沼修平氏、村山好文氏、長内美知枝氏（日本考古学研究所）に民生病院裏遺跡出土遺物（漸峰町教育委員会1989）とともに実見していただきご教示を得た際のメモが残されている。

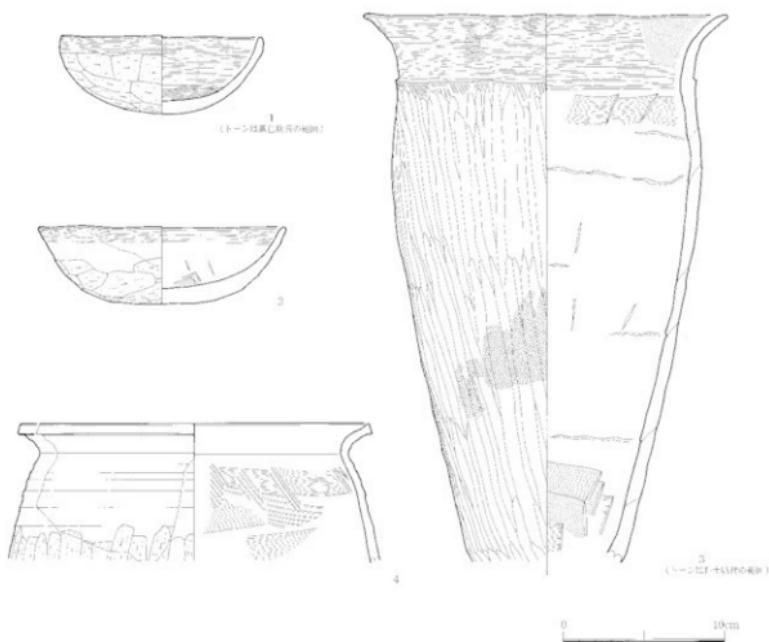
註2 昭和59年11月19日に実施された文化財パトロールには、佐藤信行氏（宮城県文化財保護地区指導員）、佐々木尚見（漸峰町文化財保護委員）、故阿部正光氏（漸峰町教育委員会）が参加している（役職は当時）。「外沢田B遺跡」は現在まで遺跡登録されていないことから、以下「 」を付して記載する。

註3 遺構の略図は掲載されているが、遺構配置図等はないため詳細な遺構配置は不明である。しかし、報告中には「小堅穴道構は整地部分の北西部で」、「南東部から2間×1間の掘立柱建物跡が2棟」検出されているという（佐藤・阿部・赤沢1985）。

註4 1～3は故阿部正光氏の原図をもとに、矢本町教育委員会佐藤敏幸氏と検討を行い図示した。なお、3は胴下部1/4の破片が現在所在不明となっており確認できていないが、原図のまま図示した。

註5 壺1については、平成15年2月9日第29回古代城柵官衙遺跡検討会（古川市）の際、鳥羽政之氏、市川淳子氏（埼玉県岡部町教育委員会）、金子彰男氏（埼玉県神川町教育委員会）に実見していただき、器厚が厚すぎるという違いはあるが器形や調整には北武藏に類似するものがあるとのご教示を得た。

註6 平成15年2月2日に矢本町教育委員会佐藤敏幸氏と検討を行った際、器形や胎土から関東地方の影響もあるのではないかとの意見を預いた。また、平成15年2月9日宇部則保氏（青森県八戸市教育委員会）に実見していただいたところ、ミガキが多用される点で東北地方北部的だが、東北地方北部型にはあまりみない器形ではないかとのご教授を得た。



第21図 「外沢田B遺跡」採集遺物

No.	施位	遺物名	残存	最高	口径	底径	特 徴	年 代%	組
1	表 接	土師器片	4/5	4.9	12.1	—	外: 壁ナギ、ケズリ、明夷模(10YRC7/6), 内: 壁ナギ、黑色物質付着、口部いわせ(7.5YR6/4)	R002	9.1
2	表 接	土師器片	3/5	4.8	13.2	6.6	外: 壁ナギ、ケズリ、施灰(10YR6/2), 内: 壁ナギ、ラウナギ、瓦模(10YR6/2)	R003	9.2
3	表 接	土師器裏	1/3	—	22.4	—	外: 壁ナギ、ハケズリ、粘土付着、口部いわせ(10YRC7/3), 内: 壁ナギ、ラウナギ、口部いわせ(10YR6/2)	R004	9.3
4	表 接	土師器裏	13~16	—	21.6	—	外: ロクロナギ、ケズリ、浅夷模(10YR6/3), 内: ロクロナギ、ハケズリ、浅夷模(10YR6/3)	R005	9.4

## VIII. まとめ

1. 長根遺跡は小山田川の南側、標高約20m前後の低丘陵に位置する。調査の結果、奈良時代の住居跡1棟、時期不明の土塹2基、溝跡2条が検出された。また、古墳時代、奈良・平安時代、近世の遺物が出土している。現在まで調査は実施されていないが隣接する荒町遺跡、王塙遺跡でも奈良・平安時代の遺物が多数採集されるため、古代の集落が広範囲に分布するものと見られる。
2. 1号住居跡ではカマドから土師器甕を入れ子状にした天井部構築材が良好な状況で確認され、カマドの形態は関東型であった。また、出土遺物の検討から8世紀前葉頃のものであり、土師器は関東地方に系譜を求めることができる関東系土師器であった。すなわち、遺構、遺物の両面から関東地方とのかかわりが考えられた。したがって、関東地方から移民が行われた状況の一端を考古学的に確認することができたものと考えられる。この際『続日本紀』靈亀元（715）年5月に板東6国からの富民千戸の移民が行われた記事との関連が注目されるとともに、1号住居跡が「柵戸」にかかるものかはなお周辺の調査が必要であろう。
3. 遺構は確認することはできなかったが、古墳時代、平安時代、近世の遺物が出土していることから今後周辺でそれぞれの時代の遺構が確認されると考えられる。
4. 長根遺跡周辺（小山田川の南側に位置する丘陵）の数遺跡で採集された古代の遺物の中には8世紀前半のものと思われる遺物が含まれている。今後周辺の遺跡の発掘調査が進めば同時期の集落が確認できるものと考えられ、8世紀前半における古代律令制の浸透過程について良好な情報が得られるものと想定される。また、平安時代の遺物も多数確認できることから今後の調査が期待される。

## 引用参考文献

- 阿部正光 1983 「瀬峰町三代遺跡出土の土器」『瀬峰町の文化財』第2集 1~3頁 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章1984「瀬峰町大里字富籠出土の戴骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第3集 6~9頁 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章・佐藤敏幸1987「瀬峰町泉谷船跡・清水山I遺跡発掘調査概報」『瀬峰町の文化財』第6集 12~23頁 瀬峰町教育委員会
- 今泉隆雄 1988 「名生館遺跡と県北の支配」『国説宮城県の歴史』77~81頁 河出書房新社
- 今泉隆雄 2003 「多賀城創建に至る陸奥國の辺境経営」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』105~114頁 古代城柵官衙遺跡検討会第29回実行委員会事務局
- 氏家和典 1957 「東北地方土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 宇部則保 2002 「東北北部堅土師器による地域性」『海と考古学とロマン市川金丸先生古希記念論文集刊行会』市川金丸先生古希記念論文集刊行会
- 大上周三・依田亮一 2000 「神奈川県における古墳時代のカマドについてー形態・構造材にみる地域性を中心にしてー」『考古論叢』神奈川』第8集 71~95頁 神奈川県考古学会
- 神奈川県教育委員会 1979 「上浜道跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告書第15集
- 栗駒町教育委員会 1994 「長者原遺跡」栗駒町文化財調査報告書第3集
- 黒板勝美編 1935 「続日本紀」『新訂増補古史大綱』国史大系編修會 吉川弘文館(1989年発行の「普及版」を参照)
- 考古学から古代を考える会 2006 「古代仏教遺物集成・関東ー考古学の新たな開拓を目指してー」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991 「三寺寺II遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第93集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「西山遺跡」立候報・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢・児玉工業団地関係埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997 「今井川越田遺跡発掘調査報告書Ⅰ(取付道路)」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- (財)栃木県文化振興財团埋蔵文化財センター 1998 「西山遺跡ー交通安全教育センター二期整備工事に伴う発掘調査」栃木県埋蔵文化財調査報告書第215集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- (財)とちぎ生涯学習文化財团埋蔵文化財センター 2001 「上神主・茂原遺跡ー上神主・茂原遺跡・茂原向原 北原東 北開東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査V」栃木県埋蔵文化財調査報告書第256集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財团埋蔵文化財センター
- 佐々木尚見・阿部正光 1982 「瀬峰町の遺跡ー桃生田前遺跡／下富前遺跡／中三代遺跡」『瀬峰町の文化財』第1集 2~3頁 瀬峰町教育委員会
- 佐藤信行 1976 「瀬峰町内遺跡踏査伝記」『郷土研究』 30~32頁 瀬峰町郷土研究会
- 佐藤信行・阿部正光・赤沢清章 1985 「昭和59年度瀬峰町文化財バトロール事業報告」『瀬峰町の文化財』第4集 1~13頁 瀬峰町教育委員会
- 佐藤信行・阿部正光・赤沢清章・佐藤敏幸 1987 「昭和61年度瀬峰町文化財バトロール事業報告」『瀬峰町の文化財』第6集 1~11頁 瀬峰町教育委員会
- 鈴木玄雄 1922 「栗原郡藤里村誌」上巻 栗原郡藤里村誌編纂委員会
- 瀬峰町史編纂委員会 1966 「瀬峰町史」瀬峰町
- 瀬峰町教育委員会 1977 「がんげつ遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第1集
- 瀬峰町教育委員会 1979 「長者原II遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第2集
- 瀬峰町教育委員会 1980 「がんげつ遺跡 第2次発掘調査報告書」瀬峰町文化財調査報告書第3集
- 瀬峰町教育委員会 1983 「大垣山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第4集
- 瀬峰町教育委員会 1985 「がんげつ遺跡 第3次発掘調査報告書」瀬峰町文化財調査報告書第5集
- 瀬峰町教育委員会 1988 「下藤山II遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第6集
- 瀬峰町教育委員会 1989 「民主病院遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第7集
- 瀬峰町教育委員会 2000 「桃生田前遺跡 下富前遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第19集
- 瀬峰町教育委員会 2002 「下富前遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第20集
- 仙台市教育委員会 1981 「仙台市山遺跡ー昭和55年度調査概報」仙台市文化財調査報告書第29集
- 仙台市教育委員会 1982 「栗遺跡 栗岡式土器縁式遺跡調査報告」仙台市文化財調査報告書第43集
- 仙台市教育委員会 1983 「宮城県仙台市中田畠中遺跡ー発掘調査報告書ー」仙台市文化財調査報告書第53集
- 仙台市教育委員会 1994 「仙台市中田畠遺跡ー古代・中世の集落跡の調査ー」仙台市文化財調査報告書第182集
- 仙台市教育委員会 1995 「下飯田遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第191集
- 古代城柵官衙遺跡検討会第29回実行委員会事務局 2003 「特集律令国家の周縁部における地方官衙の成立と変容ー多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相ー」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』53~244頁
- 高橋富雄 1963 「聖夷」吉川弘文館
- 高橋 実 1993 「奥州名勝「ゆるぎの松」の枯死を悼む」『郷土研究』第22号 1~3頁 瀬峰町郷土研究会
- 田尻町教育委員会 1998 「新田柵跡推定地」田尻町文化財調査報告書第3集
- 田尻町教育委員会 2000 「新田柵跡推定地2」田尻町文化財調査報告書第4集
- 田尻町教育委員会 2001a 「新田柵跡推定地3」新田柵跡推定地3ほか」田尻町文化財調査報告書第5集
- 田尻町教育委員会 2001b 「金鉢神道跡」新田柵跡推定地3ほか」田尻町文化財調査報告書第5集
- 田尻町教育委員会 2001c 「木戸ノ跡」新田柵跡推定地3ほか」田尻町文化財調査報告書第5集
- 田尻町教育委員会 2001d 「新田柵跡推定地4」田尻町文化財調査報告書第6集
- 田尻町教育委員会 2002a 「新田柵跡推定地V」田尻町文化財調査報告書第7集
- 田尻町教育委員会 2002b 「新田柵跡推定地VI 平成13年度団体農業整備事業ー藻師西田線道路改良に伴う発掘調査ー」田尻町文化財調査報告書第8集

## 引用参考文献

- 谷 旬 1982 「古代東国のかマド」『研究紀要』7 223~248頁(毎) 千葉県埋文センター
- 谷 旬 1995 「カマド再考」『研究紀要』16 281~289頁(毎) 千葉県埋文センター
- 築館町教育委員会 1995 「伊城跡 平成6年度発掘調査報告書」築館町文化財調査報告書第8集
- 板木原教育委員会 1974 『井頭』
- 中野晴久 1995 「生産地の編年について」『シンポジウム常滑焼と中世社会』29~41頁 小学館
- なすな原遺跡調査会 1996 『なすな原遺跡1996』
- 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 1997 『神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究(1)』『研究紀要 かながわの考古学』2 79~93頁 神奈川県立埋蔵文化財センター・財團法人かながわ考古学財団
- 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 1998 『神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究(2)』『研究紀要 かながわの考古学』3 83~104頁 神奈川県立埋蔵文化財センター・財團法人かながわ考古学財団
- 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 1999 『神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究(3)』『研究紀要 かながわの考古学』4 63~81頁 神奈川県立埋蔵文化財センター・財團法人かながわ考古学財団
- 野崎 準 1976 「東北地方における須恵器生産」『東北学院大学東北文化研究所研究紀要』第6号 47~62頁 東北学院大学東北文化研究所
- 長谷川厚 1994 「古墳時代後期土器の研究(4)」『神奈川考古』第28号 79~100頁 神奈川考古同人会
- 長谷川厚 1994 「関東から東北へ—律令制成立前後の関東地方と東北地方の関係についてー」『二十一世紀への考古学』櫻井清彦先生古希記念論文集 145~157頁 櫻井清彦先生古希記念会 雄山閣
- 原 智之 2001 「電復元の試み」『土壁』第5号 47~60頁 考古学を楽しむ会
- 原 智之 2002 「電規格の復元」『土壁』第6号 37~48頁 考古学を楽しむ会
- 日野市落川遺跡調査会 1996 「落川遺跡I 通構築—都宮落川第2アパート建設に伴う発掘調査報告書ー」
- 古川市教育委員会 1991 「名生館官衙遺跡X I」古川市文化財調査報告書第10集
- 古川市教育委員会 1992 「名生館官衙遺跡X II」古川市文化財調査報告書第11集
- 古川市教育委員会 1994 「名生館官衙遺跡X IV」古川市文化財調査報告書第13集
- 古川市教育委員会 2002a 「灰塚遺跡」「名生館官衙遺跡XV・灰塚遺跡」古川市文化財調査報告書第30集
- 古川市教育委員会 2002b 「名生館官衙遺跡第24次調査の概要」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』285~290頁 古代城柵官衙遺跡検討会第29回大会実行委員会事務局
- 樋要照 1964 「湘南町の古代遺跡について」『湘峰町史』 551~559頁 湘南町
- 宮城県教育委員会 1980 「製音代遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1981 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集
- 宮城県教育委員会 1982 「御胸原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第83集
- 宮城県教育委員会 1983a 「朽木横穴古墳群」「朽木横穴古墳群 宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
- 宮城県教育委員会 1983b 「宮前遺跡」「朽木横穴古墳群 宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
- 宮城県教育委員会 1991 「大崩八幡遺跡」「八幡遺跡」「合戦原遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第140集
- 宮城県教育委員会 1992 「金鋸神遺跡」「金鋸神遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第150集
- 宮城県教育委員会 1999 「里塚遺跡—第44・47次調査報告書ー」宮城県文化財調査報告書第179集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「吉村草遺物1直傳鏡」『多賀城跡政府跡 本文編』151~238頁 宮城県教育委員会・宮城县多賀城跡調査研究所
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1984 「名生館遺跡IV」多賀城跡関連遺跡調査報告書第4回
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992 「東山遺跡VI—加美郡街跡推定地」多賀城関連遺跡調査報告書第17回
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代ー」『宮城考古学』第2号 45~80頁 宮城県考古学会
- 村田晃一 2002 「7世紀集落遺跡研究の視点(1) —宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として—『宮城考古学』第4号 49~71頁 宮城県考古学会
- 矢本町教育委員会 2001 「赤井遺跡I—牡鹿柵・郡家推定地ー」矢本町文化財調査報告書第14集
- 六反田遺跡調査会 1981 『六反田』
- 早稲田大学校地理叢文化財調査室編 1995 『下戸塚遺跡の調査 第3回 古代編』早稲田大学

2区全景（東より）



1号住居跡検出状況  
(南より)



1号住居跡床面  
(南より)





1号住居跡カマド①  
(南より)



1号住居跡カマド断面  
(東より)



1号住居跡カマド  
遺物出土状況

1号住居跡カマド②

(南より)



1号住居跡床面

遺物出土状況（北より）



1号住居跡ピット1断面

(西より)





2号土塹（東より）



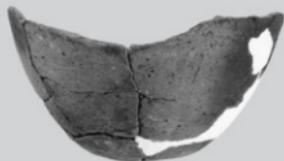
第2工区遠景（東より）



15区全景（東より）



1 土師器壊（第8図1）



2 土師器壊（第8図2）



3 土師器壊（第7図4）



4 土師器壊（第7図1）



5 土師器壊（第7図2）



6 土師器壊（第7図3）



7 砧石（第8図4）



8 鉄鎌（第8図5）

1～3、7、8…床面、堆積層

4～6…カマド構築材



1 土師器小型短頸壺（第17図6）



2 須恵器環蓋（第17図8）



3 須恵器環（第17図7）



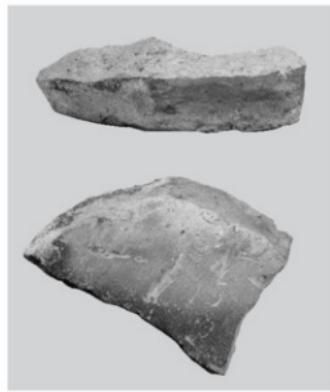
4 須恵器高台環（第17図9）



5 須恵器壺（第18図1）



6 中世陶器鉢（第19図4）



7 中世陶器甕（第19図5）

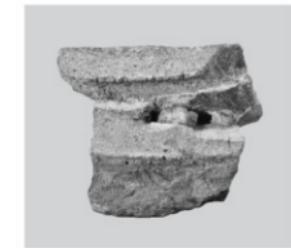
1 …三代遺跡

3～4 …四ツ壇遺跡

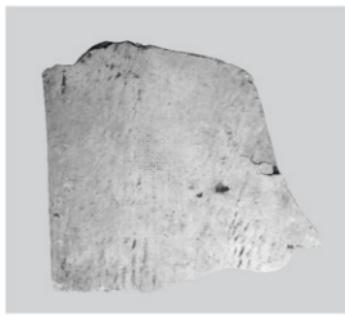
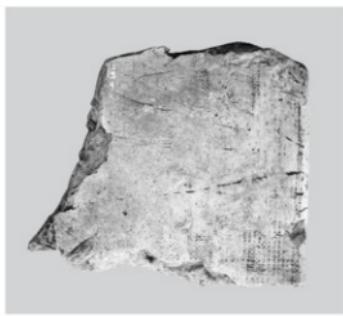
5 …四ツ壇原遺跡

6 …荒町遺跡

7 …中三代遺跡



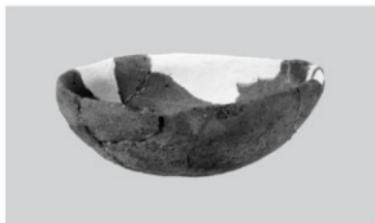
1 軒平瓦（第18図3）



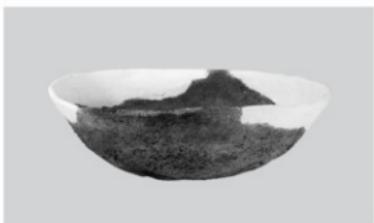
2 平瓦（第18図6）

1 …神田遺跡

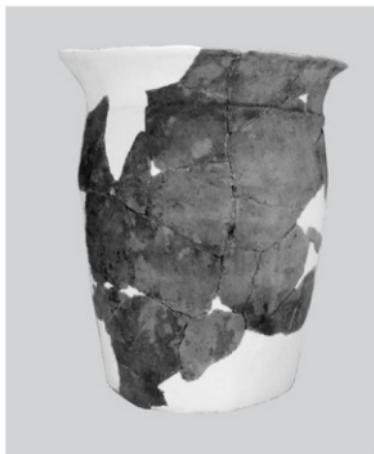
2 …伊勢堂館跡



1 土師器坏 1 (第21図 1)



2 土師器坏 2 (第21図 2)



3 土師器甕 (第21図 3)



4 土師器甕 (第21図 4)

図版8 「外沢田B 遺跡」採集遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ながねいせき						
書名	長根遺跡						
副書名	町道天神・長根線改良工事に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	瀬峰町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第21集						
編集者	安達訓仁						
編集機関	瀬峰町教育委員会						
所在地	宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1 TEL (0228) 38-2171・2172						
刊行年月日	西暦2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ながねいせき 長根遺跡	宮城県 栗原郡 瀬峰町 大里字中宮田地内	045268 46050	38° 38' 30"	141° 2' 50"	2002.8.7 ~9.4、10.3 ~10.9	400	町道拡幅に係わる確認・事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長根遺跡	集落跡	奈良	竪穴住居跡1棟 土塁2基・溝跡2条	土師器、須恵器、鉄製品、石製品、近世陶器	関東系土師器が出土、カマド天井部構築材として用いられた土師器が良好な状況で確認された。		

## 瀬峰町教育委員会文化財関係出版物

- 「瀬峰の史跡と伝承」、1971年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第1集「がんげつ遺跡－平安時代の堅穴遺構－」、1977年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第2集「長者塚Ⅱ遺跡」、1979年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第3集「がんげつ遺跡 第2次発掘調査報告書」、1980年3月
- 「瀬峰町の文化財」、第1集、1982年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第4集「大境山遺跡」、1983年3月
- 「瀬峰町の文化財」、第2集、1983年3月
- 「瀬峰町の文化財」、第3集、1984年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第5集「がんげつ遺跡 第3次発掘調査報告書－宮城県北部における奈良時代の遺跡、及びその周辺地域の調査－」、1985年3月
- 「瀬峰町の文化財」、第4集、1985年3月
- 「瀬峰町の文化財」、第5集、1986年3月
- 「瀬峰町の文化財」、第6集、1987年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第6集「下藤次Ⅱ遺跡－宮城県北部における奈良時代の住居跡、江戸時代の墓塚と墓標の調査－」、1988年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第7集「民主病院裏遺跡－宮城県北部における古墳時代後期の土器、および奈良時代の住居跡の調査－」、1989年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第8集「農谷大内家文書（一）」、1990年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第9集「農谷大内家文書（二）」、1991年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第10集「農谷大内家文書（三）」、1993年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第11集「農谷大内家文書（四）」、1994年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第12集「農谷大内家文書（五）」、1995年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第13集「農谷大内家文書（六）」、1996年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第14集「農谷大内家文書（七）」、1997年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第15集「農谷大内家文書（八）」、1998年3月
- 「瀬峰町指定文化財八幡神社調査報告－宮城県栗原郡瀬峰町藤次字横森前に所在する八幡神社本殿・拜殿等の調査－」、1997年10月
- 瀬峰町文化財調査報告書第16集「農谷大内家文書（九）」、1999年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第17集「農谷大内家文書（十）」、2000年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第18集「生田前遺跡 下眞利遺跡－富地区農業初手育成は塙整備事業に伴う発掘調査報告書I－」、2000年3月
- 瀬峰町文化財調査報告書第19集「生田前遺跡 下眞利遺跡－富地区農業初手育成は塙整備事業に伴う発掘調査報告書II－」、2002年3月

## 瀬峰町文化財調査報告書 第21集 長根遺跡

平成15年3月25日 印刷

平成15年3月31日 発行

発行 瀬峰町教育委員会

〒989-4502 宮城県栗原郡瀬峰町藤次字下H32-1

T E L 0228-38-2171-2172

印刷 南部印刷株式会社

〒987-2215 宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36

T E L 0228-22-2131